(岡山製本)

大正三年十一月廿七日印刷
大正三年十一月三十日發行

有朋堂文庫
黄表紙十種
(非賣品)

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

名作靑本畧記

一金々先生榮華夢　戀川春町 あたる
一高慢齋行脚日記　同
一鼻峯高慢男　同
一三幅對紫曾我　同
一親敵打也腹鼓　同
一楠無題記　同
一鸚鵡返文武二道　同
一喜昆布鼎屓繪草紙　同
一三升增鱗始　喜三二 あたる
一鐘入七人化粧　同
一桃太郎後日話　同
一啌多雁取帳　同
一啌八百萬八傳　同
一長生見たい記　同
一文武二道萬石通　同
一大ちがひ寶船　芝全交 あたる
一女郎の誠と玉子の角文字　同
一鼻下長物語　同
一大悲の千六本　同
一拜美須仁王樣　同
一十四傾城腹の内　同
一それから以來記　萬象亭 あたる
一きるなの根から金のなる木　唐來三和 あたる
其外大當りあげて數へ難し、引而萬象通笑の部は大全に讓る。

作者名寄拾遺
恋川好町
亀山人門人　亀遊女
万象門人　蔦ノ義門
畑ヶ丁浦
千差万別
壁前亭九年坊
竹塚ノ翁東子
南陀伽紫蘭
お馴染 休の問屋追加　かや町 宝屋奏吉
中古まで自画作とする人名
田中益信
恋川春町
中古まで自業自作の人
勸和堂大門

画工名盡　これハ未くさうし板下と体の部
鳥居清長　勝川九徳斎春英
喜多川歌麻呂　北斎辰政
北尾政演　蔥斎政美
唐来三和 廻文の外題を作に
青本の画をかく人の名
奥村　鈴木春信　石川豊信　文調
湖龍斎　勝川春章　春好　春潮
春林　春山　春雀　春常
哥川豊春

名人戯作者六家撰
喜三二　恋川春町
万象亭　通笑
芝全交　唐来三和

三馬自画作

名作青本略記
[illegible]

ひとへに大慈大悲の妙智力、行末めでたく榮えけり。
「アイ下さりやし」
「どうやらおらが娘に似て居る樣だ」

此書は鉢かづきの本文を借りて古代より十年前の文法にしたがふ。依之當時の青本とは口調大に違あり。すべて此十五丁の圖は、一流のかたちを眞似て青本通のお慰みに備ふるなり。必ず筆意をかねたると思ひ給ふな。各流儀の癖と穴とを穿ちたるにあらず。たゞ畫の形を似せたるのみにして近くたとへば役者の聲色をつかふが如し。

右全部十五葉画工諸名家圖
式亭三馬戲模寫

北尾紅翠齋畫

さても鉢かづきがみめよき姿を見て、二親はじめ大きに喜び、早速婚禮も首尾よく整ひ、夫婦睦まじく榮えけり。

こゝに又鉢かづきが誠の二親は、かの繼母のよこしまより娘を追出したる報にてたちまちめぐりて二人とも乞食となりさがり、やうやう其日を送りけるが、ある時姫夫婦大勢の供をつれて、かの過ぎ去りし母が信心したる觀世音へ詣でけるが、かの門前にて不思議にもめぐり逢ひける。姫は一目見るよりわが父上とは思へども數多の家來を憚りてせき來る涙をおしとゞめ、一先わが家へ歸りける。とかくして夫にも斯くと告げ知らせければ、其後乞食を取りあげて一生安樂に過しける。是をや仇をもつて恩に報ずるとや言ひつべし。

てくれて並み居る。
聟心の内で曰く、
「なる程おちがかゝアめは、どろ見ても美しいわえ」
聟、書入同斷。
聟、書入同斷。
「なんとどうだ。又美しいの段が違ふだらう」
と是も心の内で思つて居る。

斯くとも知らず嫁くらべの定日となりければ、兄嫁大勢こゝを晴ぞと着飾りておしろいべつたり油こてこてなすりつけて、うちかけさばきに蹴つまづくやら大騒ぎにて、今や出づるとしやに控へける。若し鉢かづき出でたらば一度にどつと笑はんとさゞめき立つてゐる處へ、一間の内より鉢かづき姫しとやかに立出る。其有様、嬋娟たる容貌桃李芙蓉の花のかんばせげにもけ高き装ひにて、年は二八を過すともまだ二九からぬ愛敬に、色ある小袖をかさね着てしづ〳〵座敷に直りければ、並み居る姉聟兄嫁も、おのが手盛りの毒くはば皿にはあらぬ鉢かづきに、一杯參つた大勢があきれて言葉もなかりけり。聟大勢具をひこ〳〵していづれもからア自慢、これ見

湧き出でければ、二人は喜び限りなく、嫁くちべの定日をぞ待ち居たる。
「ほんにわたしが苦勢をしたも、丁度鉢かけ三年になりやす」
「鉢がかけたら寶が出た。あめがいやならちたこ遣ろとう。コレ何を言はつしやる」

大勢の意見も馬の耳に風なれば、二親も今はせん方なくもてあぐみて居る所に、智慧自慢の男まかり出でていふ樣、是はよき計りごとあり、まづ兄嫁大勢を美しくつくりて並べ置き、其中へ鉢かづきを呼出し嫁の器量くらべをし給ふべし、此事の定日定まらば鉢かづきも恥を思ひて己れより身を引く事疑なし、といひければ皆々尤と同じけり。又鉢かづきは器量くらべの噂を聞くより、わが身片輪の事なれば、嫁くらべの座敷へ出てはいとしき人に恥を與ふるに等しければ何處へなりと身を忍ばんと、息子にも忍びやかに語り聞かせ、互に名殘の涙せきあへず、其夜もあけければ泣く〳〵立出でんとする折柄、不思議や戴きたる鉢がばと落ちて、中より數の寶物自然と

だによ、何だかかつぱり分らねえぞ」
「コレ地口を言ふならおれが様に言ふもんだ」
「おめえの皿じやアねえが、どうしても離れねえ氣で居なさるか。チヤあつかましいのう」

かの息子株と姫が戀中、今は互に慕りあひて、二世も三世も變らぬ女夫などととんだむづかしき譯となりしが、所詮親方の手前と言ひ、又二親の心底を恥ぢて、二人連立ち行方知れずなりければ、一家親類いとこはとこ、伯父伯母店うけ親分子分、大屋樣までの大騷ぎとなり、やう／＼に尋ね出して親里へ連れ歸り二人の胸を尋ぬるに、夫婦にならねば生きては居ぬとの相惚にて異見も絲瓜も聞き入れねば、二親をはじめ親類もあきれ返り、あの樣な片輪者を嫁に取つては兄嫁姉聟大勢に對しても外聞惡し、何とぞして片輪者を思ひきらせんとて、大勢なぶりつすかしつ敎訓する。

「頭に皿があるからべちやアねえ河童の樣だ。ハテおめえの料簡かつぱ一つ

鉢かづきの稽古所大きに評判よく、いづくの浦でも女の子の稽古屋は禅璃瑠附けたりにて大概は張り連中の多きものなるが、此娘にも手足をつけたがる者大勢ありて、日毎に入込むのらつき連中、てんでに入札の心持にて居る。中にも有徳なる町人の息子株、獨り住みのつれ〴〵に慰みながらの稽古に來りしが、鉢かづきが心ばへやさしきに心を寄すれば、姫も流石に萬更でもなく、さそふ水あらばの折節なれば、錦木の面倒もなく、こつそりさし向ひの耳にちん〴〵お手枕とぞしやれかけける。

焼繼ぎの手際にも鉢かづきばかりはいかぬ事と斷りけるにぞ、最早鉢の事は思ひ切つて、藝者をして稽古所を出し、親方がかりにて暮しけるが、頭の恰好は悪けれど器量は美しき生れ故張りに來る人多く、姫も萬更でもなければ面白く、憂さをはらして暮しけり。

「一段さらつてくんねえ」

「すゑて遣るのは恩ならずすゑさせるのを恩にしてかえ」

「おらあおめえにすゑて遣りてえ」

「瀬戸物焼繼ぎなら出來るが、鉢を取つて頭の焼繼ぎはとても出來ねえ」
「萬印早くあゆび給へ。是からずつとそれ、ずいいきのぐい上りのずいしやれのぐい歸りといふ所はどうだ」
「此頃は皆無ぶつぱらつたから、青樓も面白からずさ。すとんだ事ね」
焼繼ぎのかみ様、さぞやきもちが上手だらう。

鉢かづき姫を見世物に出した處が一向評判もなく、まづざつと二百兩ばかりの損をしければ、これではいかぬと此度は幸ひ三味線なども教へたる事故藝者にして押出した處が、今度はとんだ大評判にて、鉢かづきだからころばしたら割り樣もあらうかと、爲になるお客大勢出來て、見世物の損は早速儲け出しけり。

ある時心安くする客大勢にて相談をつけけるは、何とぞして頭の鉢を取つてやりたいものとて、色々すれども離れぬ故、此頃はやりの瀬戸物燒繼ぎに頼んだら、ひよつとして取り樣もあらうかと、大勢にて友達の燒繼ぎへ連れ來り頼みかける。

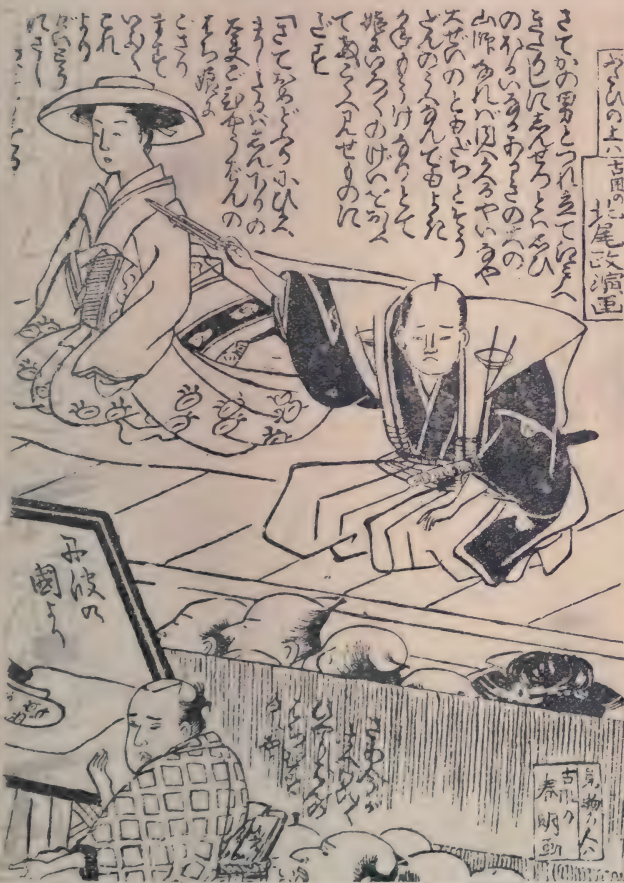
「其鉢が取れたら、頭はすぐに燒繼にして貰ひやせう」

「さあ今が前藝々々。評判の鉢娘じや」

「札買つて〳〵、評判評判評判評判」

さてかの男と連れだちて江戸へ來りしに、親切とは思ひの外田舍ぁるきの大の山師なれば、内へ歸るや否や大勢の友達と相談の上、何でもよき金まうけなりとて姫に色々の藝を敎へて、兩國へ見世物に出す。

「さてお目通りに控へましたるは新下りの太夫御評判の鉢娘にござります。いよいよ是より藝當にさしかゝらせまする。テンカラ〱〱〱ハリトウ〱〱〱。さてさて〱此次のかぶりわざ。擂鉢かぶるが夜討の段、ソレ毛氈かぶるがどら息子。こりやそれちかばかりかなんちかや、イヤイヤどつと譽めたり」

「ヤンヤ〱〱、何れも樣のお聲が便りじや〱お聲の便りは御尤はどうだ」

「王子路考に其儘の風俗だ。田舎娘の所作事が見たい」

「なんと吉公す、とんだむむくではないか」(此時代の通言也)

「なんでもあやしゝに牡丹だ」

古風のゝち 北尾重政画

古風のゝち 清長画

姫はあてどなしにさまよひけるが、とある渡し場に至りて、何とぞ其舟へ乗せて下されと頼みければ、船頭乗合の人々あやしき姿を見て、舟へ乗せる事叶はずとて櫓を押し切つて漕ぎ出す。かゝる所へ以前の百姓ども大勢、化物を打殺せとひしめいて、か弱き姫をとり巻きて既に危く見えたる處へ、江戸者と見えたる二三人づれの男來かゝりて、此體を見るより不便にや思ひけん、大勢の百姓をなだめて歸し、まづ此方へ來るべしとて、姫を伴ひ江戸の方へぞ出でにけり。

「あれと一所に歩びなせえ。何ぞ面白い事があるだらう」

「段々のお禮は詞に盡きませぬ。嬉しや〳〵」

鉢かづきは片輪なることあらはれて大磯にもすみかならず追出されければ、あてどもなしに迷ひ出るに、百姓ども姫が姿を見て化物なりとて驚く。

やれ恐しや逃げろ〳〵」

「こはい物ではござらぬ。これ〳〵」

遣手ばゝ話しする。

「あれは菅笠ではござらぬ。皿鉢の類じやそうな」

亭主いぶかる。

「よい器量の娘じやが合點のゆかぬ。五十兩なりやこちのかゝへにしても大事ない。笠を取りやいの。親の爲勤めするか可愛や可愛や」

「そなたいくつになりやるぞ。てもよい子の」

「不思議な事の。早うぼい出すがようござんす」

繪師 富川吟雪

鉢かづき姫盗賊にかどはかされて色里へ賣らるゝ。
鉢かづき姫この場の樣子を不審がる。
「これはわしが妹に違ひござらぬ。早く五十兩借して下され。ちと樣子がある故笠を著て居まする。はてさて何處からもてんやわんやな事は言はせますまい」
「あい〜十六でござんす」

父も妻の詞をまことゝして姫を憎みければ、あるにもあられず宿を立退きしが、路にて盜賊に出合ひ難儀する。

「てんと嵐富の介が拜毫顏と來て居る。これあねさん待たしやれ。伯父が惡くはせまいぞ」

「のうこはや恐ろしや。命ばかりは助けてたべ」

「やつちやしてこい。大分うまいものじや」

姫は餘りの悲しさに、なき母の墓參りして我身の不運をかこち、もはや此世にかひなき命なれば、とく〳〵迎へ取りてたべ、と打臥してぞ歎きける。
「南無頓生菩提、南無阿彌南無阿彌」

斯くて年月を過すにつき、親しき人々寄り集まり、いつ迄男の獨り住みにてもすむまじとて勸めにまかせ、後の妻をぞ迎へける。それにはかはりて、姫は生れもつかぬ片輪を恨みあけくれ歎き悲しみけるが、繼母はつく〴〵と姫が片輪なるを疎み憎みて、夫の手前ばかり親切に見せかけ、留守になれば色々の咎をこしらへ折檻するぞあさましき。

「うとましいあまではある。穀潰しとはおのれが事じや。この棒で打ちすゑてこますぞ。けちいまいましい」

のろかゝる樣許して下され」

近所の人とりさゝゆる。

「いやもけうがる事じや。それでは堪忍がなり申すまい。まづ平に〳〵」

「これはかたいは、不思議な事の」姫なげく。「悲しや〳〵」

さて一首の歌をよみて母は空しくなりければ、家内の歎き言はん方なく、娘はわけて別を悲しみ前後を知らず歎きけるが、やう〳〵に心を靜めて悲しくも野べの烟となしにける。兵太は形見の品々をあらためんと娘にきせ置いたる鉢を取らんとしけれども頭に吸ひつきて更に取れず、父大きに驚き、近しき人を集めて樣々手を盡せども離れざれば、娘の歎きいやまさり、母に別るゝのみならず、今かく片輪となりたるはかなさよとくどき立てゝぞ泣きければ、聞くにつけ見るにつけ歎かぬ者はなかりける。

「法力の奇特を見せうぞ。のうまくさまんだ、ばさらだ。おのれ其鉢を取らいでおかうか」

さしも草深くもたのむ觀世音誓ひのまゝにいたゞかせぬる。

母病氣の體。

姬鉢かづく體。

父あきれ居る。

家來不審がる。

其昔いつの頃にやありけん、都の片ほとりに平太となん言へる者ありけり。元より家富み豊に暮すが中にも常々一子なき事を憂ひてければ、朝夕に觀世音を念ずる志感應ありけん、遂に一人のみめよき女子をぞ設けゝる。かゝれば父母の喜び言ふばかりなく、尚行末娵のめでたからん事をねぎして年月を經る程に、娵は早十二といふ年の春をぞ迎へける。さるが中に母風の心地と打惱みしが、日々夜夜に衰へ今はのきはとなりて娵を近づけて言ふ樣、妾はあの世の道へ赴くなり、おことが行末をも見ずして先立つ事の悲しさよ、と涙せきあへず、傍なる手箱より重げなる包み取出して娘の頭に戴かせ、上には肩の隱るゝばかりなる鉢をかろむらせ、母かくぞ詠みける。

松會開板

稗史 不案實記

江戸地本問屋眞印

○當時出板元

式亭三馬編纂

右に述べたる趣は、近く佛の方便屋に基き、本來無名次を種として比喩のたとへにさとしたり。是に於て人身を保つこと烟管を持つに等しく、常に己を磨く時は光あり。磨かざれば忽ち煩惱のやにつかへて誠の道へ通り難く、又灰吹のあたりを愼まざる時は、一生の疵となる過ちあり。されば心をきたゆる事唐直鍮の如く、義を重くすること鐵張の如くせば、遂に是非のつぎ目を忘れて早く無何有のきやう傳張に遊ばん。唯雁首の曲らんより、世はらう竹の直なるに從ふべし。めでたしめでたし。

文章無一物
趣向本來空

曲亭馬琴作

まだ色々誂へる物があるから、ちつと待つてお出でなせえと、御新造様がおつしやります」

烟管「何でも此末おいら夫婦が附添つて居ては、旦那がとち萬兩の分限になる樣に守らねえけりやア、世話になつた甲斐がねえ」

無「今年京傳が見世の新形物が色々出來ましたそうだ。是を緣に致して外外へも吹聽いたし、一つも餘計賣れる樣にとそばながら存じます。今時京傳が見世の烟管烟草入を持たぬ者と薩摩芋に唐茄子の嫌ひな女は、とんと拂底で御座ります」

蕬悲「山東の烟管烟草入を買ふ人は、奇妙に運が強くて末は極めて仕合せがいゝといふ事だ」

たとへ「御覽じませ、烟管烟草入が見違へる樣になつて參りました」

方便屋無名次が親慈悲右衛門は、たとへが勸めの女子に似合はざる貞心を見屆け、又無名次も一旦若氣の誤りとは言ひながら外に是ぞといふ事も無きに、烟草入の面迄かぶせ知らぬ顏で見て居るは親の慈悲右衛門なきに似たりとて、遂に勘當を許し、たとへを引取り改めて夫婦の盃を取結び親子喜ぶ事限りなし。これにつけても今迄二人が身に附添ひて艱難を共にしたる烟管烟草入なれば、一生夫婦が身につけて昔の艱難を忘れぬ爲にとて、雁首の離れ吸口のつまりし烟管と、きれて穴のあいたる烟草入を京傳が見世へやりて、烟管は張り替へ烟草入は縫ひ直させければ、忽ち昔の姿にかへりて、烟管も烟草入も無名次もたとへも一生めでたく榮えけり。

松「御進物の烟管とお烟草入は明日殘らず出來上ります」

下女「山東の若い衆に、

たりとは、薬鑵直しから吸口を買取る事なり。鳥は三十日の月に浮かれとは、夜鷹の誠なり。芋は親子につながりて喜ぶとは、たとへが無名次親子に巡り逢ふ喜びを知らせしなり。烟管の古きは薬鑵直しの手に渡り、烟草入の破れたるは物貰ひの面となる。世の中の盛衰之を見ても悟るべし。

親方「夜鷹のつらへ火のしをあてゝ、皺を延ばすとは違つて、燒金とはちと荒療治だわえ」

慈悲「これ〳〵そこな三荘太夫、小粒じやアねえ小判だがどうだ。イヤぎろとも言つて見ろ。夜鷹の身受は珍らしかろう」

無「コレ〳〵其吸口はわしが免れぬものだ。どうぞ是で賣つて下せえ」

いかけ「おめえ吸口ならい八百屋へ行きなされば、柚子でも山椒でも好きな物があるに、物好きな人だ」

彼親方は至つて邪見なる男にて、たとへが美しいに似合はず一向錢にならぬを憤り、器量のよいを見込に買ひかぶりをした腹いせに顔に燒金をあて、世間並の夜鷹にして稼がせんと、火炎々たる火鉢の中へてつきうをさしくべ、たとへが顏にあてんとす。又表には銅壺藥鑵直し來りて、たとへが烟管の吸口を金壺へ打込んで既に鍋をいかけんとす。たとへも今は絶體絶命、又吸口も火しご時、既に危きその折柄、うしろの障子をさつと開き、無名次が親の慈悲右衞門、物をも言はず二三十兩の小判を親方のつらへぶつゝけ、終にたとへが身受して我家へ伴ひ立歸る。表に來かゝる無名次が、用意の小錢首出して、藥鑵直しの手前よりかの吸口を買取りけり。是雁首が要中に知らせたる四句の偈に、火鉢に向つて黃金を拾ふとは、たとへが身の上なり。又鍋を採つて吸口を得

これさへ覺えて居ればまちげえはねえ。併し大師さんのおみくじじやアねえによ」

扨又無名次は道中にて裸にされ、からろう島の襦袢さへ無ければ、是非なく是迄附添ひたる烟草入を引きさき、これに目鼻の穴をあけて面にかぶり、味噌漉の三味線で四竹節をひき歩き、たと へに巡り逢ひ互に喜ぶ其折柄、無名次が親の慈悲右衞門是も不思議に此處へ來かゝり、思はず二人が樣子を見屆け、たとへが誠を感じけり。これもかの雁首の錢一文の導きなれば、今も親身の事を一文といふ。但し門の字はあて字なり。

無「今度稀なるちんぢうのきせるトチテン〳〵」

慈悲右衞門「ハテ悴が聲の樣だが氣の迷ひか知らぬ」

扨もたとへは夜鷹とまで落ちぶれたれど、廿四文で肌身は汚さず、忠臣講釋のおりえを見る如く、來る夜の客に譯いうて草の枕をかはさぬ故、美しけれども錢にならず、やう〳〵人の情にて五文八文づつの錢を貰ひ親方前をつくろひけるが、ある夜貰ひためたる百の錢の内に、古き雁首を鑢一文の名代につかひたる錢あり。此錢忽然とたとへが枕上に立ちて身の行末を告げ知らせけり。

烟管「ぜにざい〳〵。我は是そさまの烟管の吸口なり。今一もんのよしみにつながれ、萬更見ても居られぬ故、明日の樣子を知らせるなり。

○火鉢に向つて黄金を拾ひ、

○鍋をさぐつて吸口を得たり。

○鳥は三十日の月にうかれ、

○芋は親子につながりて喜ぶ。

く。

飴賣「ぬけたらしよ、とつけいべい。錢ならなほよし。こいつは洒落でも何でもねえ」

かゝあ左衞門「これ〳〵とつけいべいどんや、こゝに入らぬ烟管があるが、取替へる氣はなしか。しかもらうがあめちうだからかうばしくて、齒形もつかねえ上代物だ」

烟管「こゝの内の小指は一日十匁の烟草を吞んだ上烟管を一本食つて仕舞ふとは、始終いゝ品玉づかひになるだらう」

親方「二十四文の代物にしては餘り美し過ぎるべちやアねえ、腹太餠の中へ鳥飼の饅頭をならべた樣なものだ。併し饅頭にして三十二文と賣つても、まだ安いもんだわえ

人の行衛と烟管の雁首は何處の浦へ賣られて行かうも知れず。たとへは過ぎし頃廓へ引戻され、唯明暮無名次がことのみ思ひつめ更に客の心を慰めねば、親方も大きにもて餘し、其後度々鞍替されて種々無量の艱難をすれども、誓つて客に出でざれば、此上は外の女郎の見せしめにとて、無筵や夜鷹に受けかへられ、板じめの三つ蒲團から蓙一枚の憂きふしをかこちけるが、此の時かのたとへが烟管も樣々の人手に渡り、果はらうのすげかへに賣りかへられ、又めぐり／＼て此家の番烟管となり、ほこりだらけの烟草盆に空しく埋もれ居たるが、此うちのからあ左衛門、ある日とつかいべいを呼込み、はかなや白玉飴二本と賣りかへられ、又いづくとも無く出でて行

爻を見て逃げる子供と胡廝の灰につかれた初旅は、始終はだかにされねばならず。無名次は道中にて追剝に出て逢ひ、あてはめた路用は勿論、著ぐるみまつぱだかに剝ぎ取られ、身につくものは畧丸のみにて、はだか身のふんどしに胡散な烟草入をぶらさげ、まごまして居る其有樣、恰も米搗きの夕立をくらつたるが如くなり。

盗人「何でもよい鳥がかかつて金の蔓と思ひの外つかひ込んだ鍋を見る樣で、さつぱり金氣の無いやつらだ」

無「斯うはだかにされては理窟なく、湯にいつてあたゝまるより外仕方はねえ」

烟草入「わたしやア烟草入だけきせるかと思つたらやつぱり剝がれて、きりまぜ五匁の損といふものさ

世の中につらいものは、ひまなかゝりうどと忙がしい花嫁なり。無名次もいつがいつ迄乳母が内で喰ひ潰しても居られず、上方に少しのゆかりあれば、それをしるべに上方へ旅立ちけるが、かの烟草入も是迄無名次が世話になつて、言ひかはした烟管にも一旦めぐり逢ひし恩を忘れず、此時迄も附添ひて旅の憂さを慰めける故、烟草は辛苦忘れ草とは此時よりぞ。アヽ古い奴だ。

烟草入「如何にしみつたれだと言つて、かんぜんよりで結び附けたさげ烟草入にされちやアいくぢやアねえ」

馬士「あかは出る〳〵脊中はよれる、あごのあたりで汗になる。これじやあこけが湯に入つた様だ。おや〳〵道中馬士らしい」

たばこ入「おらが旦那も、いとしや湯錢に貰つた八文の錢で玉くづれを買ひにやらつしやる。これが浮世の息子たちへよい敎訓であらうわいの」

ビイ〳〵〳〵。これは絲車の音。屁をひる音では無御座候。

無名次は生中に駈落して大きにごふ恥をはたき、今は世間へ面出しもならず、王子在郷の乳母が内へ落着き、さむしい暮しの中で世話になつて居る事なれば、食ひつけぬ引割り飯で散々腹をくだしけるに、かの烟草入も昔の樣にたてや國分は入れられず、これも一山八文の臭い烟草の、しかも抹香の樣に粉になつた奴を、雁首ですくひ／＼呑まれける故、遂に烟草入も共に腹をくだして、不斷からつぼうになつて居る仕儀となり、湯錢に貰つた八文の錢を、後生大事に烟草入の隅へ入れて置く。人も斯うなつては、手のひらへ吹殼をはたくに間のないものなり。

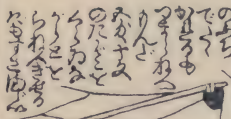
無「昔は國分がおくびに出る。今はやう／＼一山八文。ハテ是非もなき世の盛衰じやよなア」

此男「何ぞ錢儲けがありそうな物だ。遊んで居ると烟草べい呑むから、此上は尻から烟でも出すより外しよぜえはねえ」

烟管「上りがまちの角や金玉火鉢の縁で叩かれるも詰らねえもんだ。五匁十匁の烟草をくらひながち、通らねえ烟管だもすさまじい」

たとへは是非なく廓へ引戻され、大きに叩かれ折檻された上、思いれに鍛へられて、二度の苦界の憂目を見れど、一體大丈夫な女故少しもへこまず平氣で居れば、彼のらうを踏み折られ途中に捨てられたるたとへが烟管も、思はぬ人に拾はれて、これも昔に事かはり、毎日火鉢の角で叩かれ樣々の折檻に遇へど、元より山東仕込の大丈夫なれば、少しもへこまず平氣なものなり。

内所「てめえ年の内に身儘をしようと思ふは、質に置いた代物を洗濯にやる様なもので、とんと利に當らぬ事だ」

やりて「爲にならねえ客人と似合はねえ着物は、早くきれて仕舞つた方がよう御座りますのさ」

烟管「とても心中がならずば、てつか野暮な銀流しにでもなればよかつた。何でもかろ叩かれちやアたまらねえ」
烟草入「如何に廓の伊達烟草でも、あんまりいつこくぶな人たちだ。やれ鬼殺し、出逢へ〳〵」

斯くて無名次、たとへは路二三十町落ち延びし處に跡より追手かゝり、無名次を散々打擲して無理無體にたとへを引立て、とう〳〵廓へ引戻す。この騒ぎにたとへが烟管は、無殘やらうを踏み折られぬかるみの中へ踏み込まれけり。又無名次が烟草入は袂の中にしがみ付いて居たりしが、これも口を引きさかれ、可愛やたとへも無名次も、烟管も烟草入も、是よりまた別れ別れになる。

追手の人「こつちの玉烟草さへ取返せば、跡の火付きがよからうが惡からうが、是非見世口まで連れて行かねえけりやアならねえ。たばこと言はずと歩びなせえ〳〵」

追手の人「惜氣なしに叩くには、番烟管が氣が張られえていゝわえ」

ふはときせる筒、肌の一重は薄くとも、いつかは花の櫻張り、子まで設けて芋張りの、一生添はう添ひましよと、言ひかは骨と寒菊の、盛も見せず引き別れ、どう後家張りで暮らされう、思へば氣さへくさらかし。六角張りの路もせを、筋も要中に辿り行く、烟草ぼんなう果しなく、消ゆる火入ぞあはれなる。

きせる「はや明方の鳥の聲、とつけいべいと鳴くわいのう。とりかへちれぬその内に、覺悟はよいか南無阿彌陀佛」

たばこ入「待ちなせえ。ちつとひもじくなつたから、頭へ五匁入れてどうともしやせう」

道行しんぢう煙管金性

歸り行く春の雁首おとづれて、今は月日のねずみやも、わが身のさびとしら竹の、らうより細き田圃路、茅花ぼくちの移り氣は、今日からやめてたばこ入、戀故心揉み紙の、濕り勝なる丹底に、人の謗りもかます形、何をくし〳〵樽形や、思ひきれ地もありながら、きれぬ請合丈夫向、それさへ儘のかは烟草入、さんどはおろかいつ迄も、しつくりあうた金物は、緣の絲縫ひ隱し縫ひ、かんせん縫ひの離れぬ仲と、抱いてねつけの夜もすがら、二人緒〆にしめ寄せて、つい吸口の惡じやれも、通り過ぎたる心がら、丸い火皿のうち磨き、大盡張りに請け出され、思はぬ出世張りよりも、二人手鍋をさげ烟草入、鶺鴒張りのめうと事、羽織を

月に村雲花に風、烟草に五月雨烟管にやに、儘にならぬが世の習にて、無名次たとへが戀中も、今は添はれぬ義理となりて、迚も此世で添はれずばと、すてつばうな料簡を出して、遂に廓を抜け出でければ、かの烟管烟草入も共に死なんと浮れ行く。これをしんぢうの烟管とは申すなり。

無「傾城の誠は田町の暗闇で上草履へ犬の糞をふんづける時思ひ當る」

たとへ「もし今日は血忌とやらじやアねえかね。暦にも心中よしといふ日も有りそうなもの でおす」

無「かういふ身の上でなけりやア舊林子の處へも一寸顏を出して行きてえもんだが」

無名次は吸付け烟草の味を忘れ難く、後には外を内にする位なれば、親仁も大きにもてあまし、諸親類相談の上、此末無名次が吸付け烟草にあきて廓通ひのやむ樣にと、梅干の樣な爺樣たち、無名次を眞中に取卷き、矢鱈に吸付け烟草を呑ませて、尻の穴から烟の出る程たんのうさせんと詰めかけたり。今も人に意見を言はるゝ事をいぶされるといふも、此謂れなるべし。

こちらの爺樣「若い者の錢の遣ひはじめは手拭はき物烟管烟草入からはじまる。此上どの樣な烟管でも、手前のすいたのを持たせる程に、傾城の吸付け烟草はやめにしやれやめにしやれ」

無「助六の吸付け烟草と違つて、爺樣たちの吸付け烟草は、六阿彌陀巡りの通りすがいを見る樣で色氣がねえぞ」

皆々「上戸の酒に醉つたと違つて、下戸の烟草に醉つたのは意見の言ひ樣が御座らぬ」

眞面目だ」

無名次不思議の烟草入を持ちて大きにもてたるより、今も通人者流、これは持てる烟草入だ、これは持てぬ烟管だなどといふも是よりはじまる。

たとへ「しげ／＼だから一服呑んでお歸りなんし」

たばこ入「ノウなつかしの烟管殿。定めて吸付けられて出される度々、しみつたれた客人の臭い口へも入らさんしよ。わたしが事を苦に病んで、咽喉つまらせて下さんすな。こよりは元より味噌汁も、折々呑んで氣を通し、ちうでも替へて下さんせ。どうやらお前の金色がわるう見えてわしや苦勞じや」

烟管「言ひたい事は山々なれど、咽喉が詰つて息も出ず、通らぬ心がじれつてえ」

こゝに又かの烟管に馴れ染めたる烟草入は、方便や無名次といふ相應な息子に買取られ、いやな烟管と添寢して、これも明暮言ひかはせし男烟管を慕ひけるが、縁といふものは不思議なるものにて、此頃無名次このたとへに馴染んで折々通ひけるが、此烟草入を持つてから、どうも內で吞む烟草は甘くなく、とかくたとへが吸付け烟草を好ましく思ひ、これよりそろ〳〵足が近くなれば、たとへもまた萬更にも思はず、無名次が烟草入を見ぬ日は一日塞いで痞がおこり、無名次もたとへが吸付け烟草を吞まぬ日は飯を食つても味がなく、どの樣な忙がしい日も、まづちよつと格子まで來て烟草を吞んで歸る。今も忙しい時一服吞む烟草は格別甘く覺えるも此理なり。

○本草洞詮に、烟草一名は相思草、その名自ら男女の情慾あるに似たり。

作者曰「こればつかりは

もする樣だ」
たとへ「烟管は傳さんの所がいつちようおつす」
きせる「とんだ所へ買はれて來た。晩から格子の間を出たり這入つたりする事だろう」
かむろ「おいらんがじれさつしやる時は、又あの烟管で叩かれるだろう。いつそ苦勞だのふ」

何處の里かは知らず、ころにたとへといふおいらんあり。至つて京傳贔屓にて、廓へ入込む商人も多けれども、烟管烟草入は山東の店の代物でなければ承知せず。今日も江戸行の若い者に誂へて、烟管を一本買ひにやりけるに、彼魚子地の紙烟草入に馴れ染めたる烟管、思はず此とも(こ)ろへ買はれ來り、美なるおいらんの手に觸れて、仇なる里に日を送れど、一向心浮張りとならず、明暮野暮に言ひかはした烟草入の事のみを思ひ詰まりし咽喉のやに、辛い目にあふ心地せり。

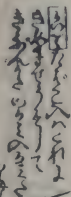
わかい者「もしおいらん、お誂への通り火皿が小さくて通りがよくて、そして氣が利いて居りませう。マアお使ひなさつて御らうじまし。これじやアどうか雇ひ禿の世話で

あげ、正體涙正札の、ふてふの別れぞ是非もなき。

こちらの買手「評判ほどあつて、こちの烟管は命知らずじや」

買手「烟草入はこれに極めませう。そして紀文形の紙入が見たいね」

「せん日お頼みの印もほりかけて置きました」

番頭貳朱が商ひに口を八百ほどきいて、上端八文のつりを出す。

腰に烟管烟草入あるは家に夫婦あるが如く、何れが缺けても用が足りず。たとへば、烟管の性は堅くして男に等しく、烟草入の性は軟くして女に似たり。又烟草盆は木なり、烟管は金なり、火入れは土なり、灰吹は水なり。これに烟草の火を加へて、木火土金水の五行を備へたれば、烟管烟草入にも自ら七情の迷やありけん、京傳が見世簞笥の中にありし唐眞鍮の烟管と魚子地の紙烟草入と、いつしか深き仲となり、沖も買はれて行くならば二人一所と言ひかはせしが、儘ならぬが賣物の習にて、ある日二人の買手來りて、かの烟管と烟草入を別々に引き分けて買ひ行きければ、是より離れ離れとなり、烟管は火皿の身を焦せば、濕りかへりし烟草入、互にわつと聲を

京「酒を買つて尻をきられ廂を貸して母屋を取らるゝと、當時くさ草紙の作は曲亭先生に留めました」

などと傳公合せ鏡を言つて媚しがらせる。

馬琴「畢竟數ならぬ我等が不束な作では御座れど、先生の御名が愛敬になつて落が來そうな物で御座ります。いづれ早々案じて見ませう」

烟管烟草入「馬琴さん今年はいかい御世話になります」

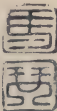
京「去年中もお作の草紙に見世の烟管烟草入をお弘め下され、お心入れ辱ろ御座ります」

馬「時に大人、去年三島でも弘めなされためりやすは妙文句ね」

見物の曰く「馬琴と京傳が話だから、何ぞ面白い事かと思つたに、野郎の岩おこしを見る樣で、かたきし堅くて齒が立たねえ」

身の低い者を見ては戯作者の様だといふが、げにも畫にかいた京傳と馬琴が顔は、唐茄子と南瓜の如く、たゞ味のあると味の無いばかりにて、一寸と見てはわからず。そこで同氣相求め同病相憐れむたとへに等しく、常に行き通ひて睦み語らひけるが、或時京傳馬琴が庵におとづれ、商賣物の烟管烟草入を持ち來りて曰く、くさ草紙も數多く書く時は、急に困るものは趣向なり、近頃足下のお作は問屋の頼みも多ければ、定めて趣向に困り給ふ事もあるべし、そこを思うて今日召し連れたるは、我等が商ひ物の烟管烟草入なり、これを今年の種にして、一番書く氣はなか坂先生、是非是非筆を取り給へと、無理やり袖を引札ならぬ趣向に、馬琴も幸と工夫とり〴〵様様の、既に草紙を綴りけり、

寛政辛酉上春走筆於著作堂雨牕

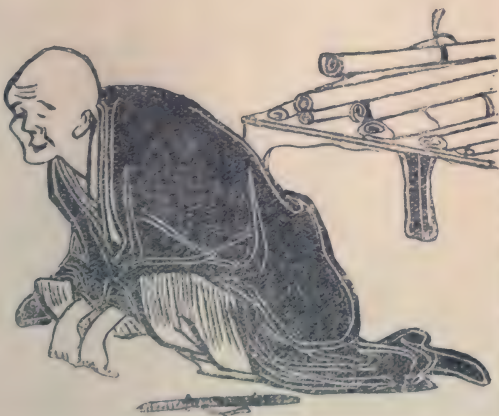
江戸曲亭馬琴

辛酉春馬琴翁著
上
巻
曲亭一風
京傳張
通油町 蔦十板

舌代

不調法なる戯作仕差上申候。是にて御間に合候へば何卒御覧の上御出板可被下候。初而之儀に御座候得者あしき所は曲亭馬琴先生へ御直し被下候様此段よろしく奉願候。又々當年評判すこしもよろしく御座候へば、來春より出精仕御覧に入れ可申候、右申上度早々不具。

十月十日

蔦屋重三郎樣

人々申上候

時太郎可候畫作

といふとも、何の益かあらん。合點か〳〵」

あはの御前。

小鍋粥のかみうはずみ。

だらち大臣ひろむね。

かくごの前。

斯かる折柄光明赫灼と放ち、見えばうとしわんばうの中へ山の神の辛抱を加へ三ばう荒神と現じ給ひ、互にいくさは五分々々なれば、此後遺恨あるまじと、兩方へ細々と示し給ふ。

「樂しみ極まる時は苦み、窮して後必ず樂し。匹夫の儉約は己れが吝嗇にして、まことの儉約に非ず。足る事を知つておごらず、あく迄むさぼる事無くば、雙方共に如才のなき身の上となるべし。掛取勢は其性質素に過ぎたり。餘力ある時は必ず樂しむべし。ひろむねは其性放埒惰弱の生れ故、己れが家業を大事につとめ、富んで奢らざるこそ肝要ならん。三面のかたちを三度拜して、工面の違はぬ用心すべし。しそこなつた跡にて無南三寳

「一厘も残さずさつぱりとおつ拂ふからは、もう頭はあがるまいが、どうだどうだ」
「とつときたないわろたちじやわい」
「ハイ〳〵何さお前様、御さやうに仰しやらずとも、もう〳〵御きんとうなお手際、髄にあやまり入りました」

のみすゑがおつ倒したる掛取勢、少しのみかけ山に息を休むる折柄、ときをどつとつくり、唐棧のしたられに白革のぱつち石割の雪駄をはき、大だんなてだいの後胤、でだなの番頭太かねありと名のり、直なる弓に黄金の弦を張り、もろほつのろはの尖矢をつがひ、さしひきしてこそ出したり。

案に相違の事なれば、皆々大いにはいまうして、土に頭をすりこみ受取の雛形まで取上げられ、既に降参を乞ひける。

のみすゑは散々に借り倒し此時高みにて見物する。

やう／＼はれ／＼と晴れ渡り、ぜに金の山久しぶりにて見ゆる。

かねありが軍勢、天秤にかけて一人も殘らず物の見事に拂ひのけ、家再興すること そ頼もしけれ。

て稼ぎける。
「もしゑゑんなんし。むしむし」
「この原での高尾だア。一きりふりだすべえか」
「いやもうわしは敵に後を見せるじやて」

掛取勢大きに敗軍して、はじめはひろむねを大將の懷子と侮り、十分に攻めはたりしも、のみすゑが手ひどき手並に懲り、一先息をつがんとのみかけ山にたむろする。

諸軍勢退屈の折を伺ひ、ひろむねの草履取しが内といふ者、下部ながら忠義の者にて、女房おためと言ひ合せ、商人となり又は辻君となりて、身杉よすぎの間に出でて窃に敵の懷をうかゞひ、ひろむねの家を引き興さんとする。

皆々陣屋のはめをはづしてをどりかける。

「代りをつけて下せへ。ぞろぞろ〳〵」

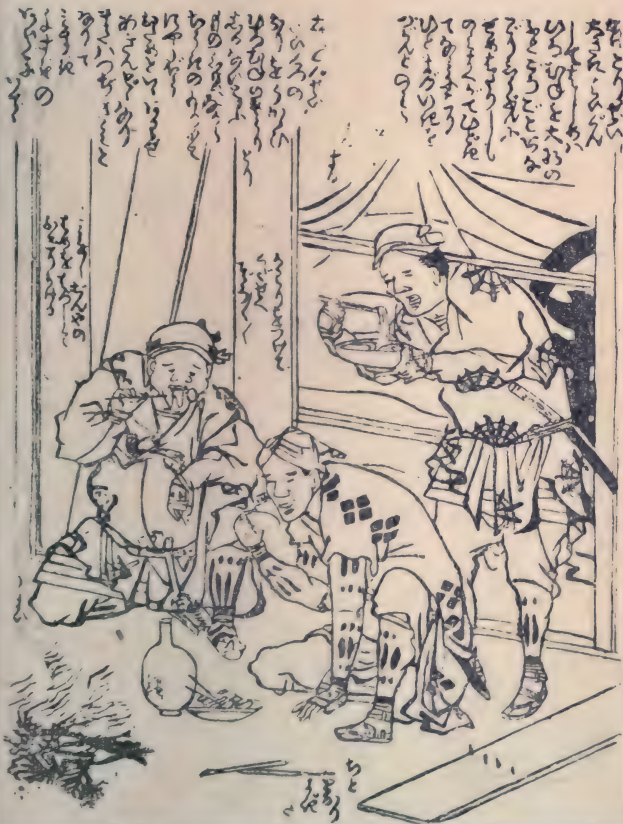
「ちと通りすぎた」

「牛蒡の太煮、さめのあんかけも御座ります」

おためも夫を大切にお主へ忠義一筋に、四つになるま

る。

のみすゑの本陣尻くらひ觀音の森見ゆる。

「投げたノ＼見さいな。鎗を投げた見さいな」

「借錢に鎗を用ゆる事は、長くつゝかけ物にするといふ心を汝等知らざるか」

「片はし梅びしほの如くにして、甘露梅はどな涙をこぼさせてやらう」

「又してもノ＼にやりくやりでつき出され、一向はかやりがせぬ。思ひやりのない」

「いつも上手でぶち殺され、ねから利分のない事さ」

野太鼓の面々はすつぱの川を越え、七面堂のうしろなるふとつ原に打つて出て、中にものみするの先陣めつた彌太郎といふ豪傑者、あてなしの鎧に身を固め、腕つきりと名づけし大太刀を佩き、食客のとちめん棒火の車の如く打振り、掛取勢のまん中へ會釋もなくかけ入れば、も先に隨ふなげやりの面々、やりばなしに踏み倒し〳〵、こゝをせんどと働きける。

勝ち誇つたる掛取勢思ひもよらぬ横あひよりめつた彌太郎にかり立てられ、其上なげやりにやり流され、一足もたまり得ず大倒れに倒されけるぞ心地よき。

中にも手厚き掛取はおかまがへしに取つて返し、摑めて取らんと思へども、皆々はじめの手並に恐れ、世のあけるを待ちて各引取りけ

こゝに日頃ひろむねに愛せられたる野太鼓組の張本世の中承知之助のみすゑといふ不敵の上手者あり。ひろむねが落城の由を傳へ聞き言ひがひなき事に思ひ、太鼓を以て軍勢を集め、一番新手を以て掛取勢を踏み倒さんと、羊羹色の物の具胸つきりに著し、同じ毛の頭巾まぶかく、さやなりと名づけし一腰をさし、二十七歳たる大年むまに鞍がへきせてぶらりと乘出し、はだか百貫目の大筒小脇にかい込み、同じ仲間の懷脇差を携へ、立ちきられざる物前を辛抱させんと勇みに勇みかける。

「猪牙じやあぶなし荷足じやのろし、永代かけちやア遠からん、急げ者ども、あとでも茶漬たべるのだ」

「鈍なわたしが太鼓の役目、しかし此太鼓も親のばちあたりでなければ本の音は出ませぬ。とかくずるいが勝の世の中でござります」

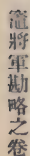
馬さへ平氣にてひゝんひひんとせゝら笑つて居る。滅多にたゞなの許されぬ奴なり。

斯くてひろむねの御臺かくごの前、めのとまゝよが介抱にて危き場所を逃れ出で、貧樂寺の片ほとりに忍び暮して居給ひしを、くづは五左衛門が組下の者之を見出し、かくごの前をうちどりにせんと大勢付け込みければ、めのとまゝよ、女ながらも色々働きけれども叶はずして、遂に身の皮をはがれけるこそはかなけれ。まゝよまゝの皮と謡ひし唱歌もこれなるべし。まゝよはかくごの前を戸棚へ隠しおき、身の皮をむかれ其上身を切り賣りにしてお主へ忠義をつくす。

「ふんばいでもあき足らぬ奴だ」

「身の皮はおろかつらの皮をむかれても何とも思はぬ。この苦しさもかくごの前様のお爲じや」

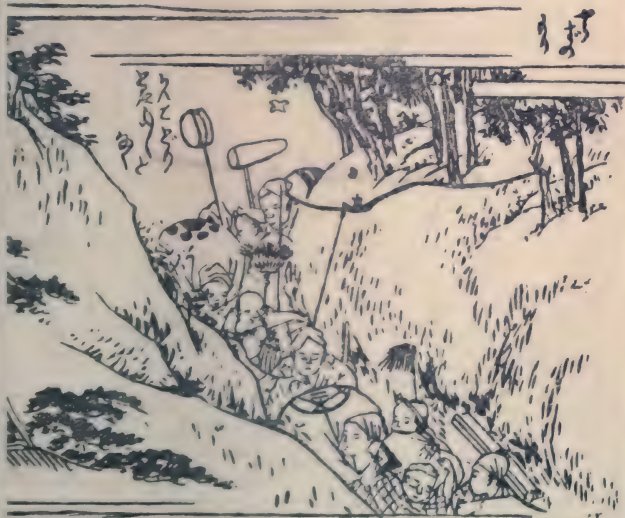
斯くとも知らず掛取勢究竟の弓張をえらみ出し、口先を揃へて攻めはたらかんと紺絲縅しの風呂敷猪頸にまとひ、白き革のぱつちをはき、石割と名づけたる太くたくましき雪駄に跨がり、或は京談國言葉、思ひ〳〵にときの聲をあげて押寄せしが、分散畏任が計略にかかり、百貫のかたに編笠傾け、大倒れに倒れてはふはふの體にて退きける。

斯くて搦手の合戰ひどく、早落城の由聞えければ、大手の大將白壁大藏の太夫うりする、一先時節を待つて然るべしと、やがて表間口を引拂つて、小遣の雜兵はした錢藏に申付け、おもてぞりなる松板に一首の歌を殘し、家内ひそかに引取りける。

ゑ、二季の大ばらひ滯りなく賑はしき祭禮なり。此坂を次第にのぼれば漸くに本街道に出でて、お國の松枝を垂れ、色をかへず、萬代不易の城郭あり。ひろむねはこの難所を志しけるぞけなげなり。

やらずの森。

かんこ鳥ときよ〳〵と鳴く。

御臺かくごの前も落ち給ひ、皆々ぬけつくぐりつして防ぐと雖も、目に餘る大軍にて皆々討死しける。斯くては始終覺束なしと、ひろむね自らさんだんの櫓にあがり、工面才覺の謀を以てこのせきばんを切抜けんと、後陣に控へしりあひの歩一かねたか、同じくぶんじすみかね、同じくぶんさん專任、兄弟三人の兵に謀を傳へて、其身は僅の家内を隨へ・心細くも取つたか見たかの山あひよりやらずの森を志し、胸を極めてひつそくする。

此處は七ころび八起きといへる難所にて、下り坂には捨てる神の社あつて、節句前にはあとの祭とてさみしき祭禮あり。皆人よい〳〵と之を名づく。のぼり坂には助ける神の社ありて、物前と雖もこゝにおみ與をす

知られける。

此時に當つて心弱き者は踏んで踏みつけられ倒るゝ者數を知らず。

わうじやうじの寂滅法師、やけのかん八踏み留つてはたらくと雖も、皆々借錢の淵におし落され、浮む瀨更に見えざりけり。

やけのかん八「大げさにぶつぱなそう」

掛取勢度々矢を射かける事火のふるが如し。

寂滅はあてのちがひしかけやにて叩きつけんとあせる。

借錢の淵に沈み一生あがきくらす。

とりつぐ大息ついて委細を語る。

「さあ〳〵叶はぬ場所、じばらをお切りなされまし」

「ア、痛い〳〵。踏み倒されたりあてられたり、ほんに命が物種だ」

寄手は搦手より亂入して短兵急に取り立つれば、何かは以てたまるべき、質は流れて柳原の軒をふさげ、家財は積んで道具屋の見世に累々たり。されば今迄要害と頼んだる金銀の山もいつしか借錢の淵となり、浮世を渡る言葉のはしも中絶えて、まゝの川の船出さへ櫓櫂もまはらぬ折柄、弓はり一人取つて返すを見てあれば、ひのへの口上とりつぐ大汗になつてかけ來り、事の難儀を告げる。

すみかた斯くと見るよりきかぬ木の楯をつき内所の幕を張り、人を踏臺にして下知をなす。

斯かる折節横合よりひど金の璧耳元にひゞき、ごとう三八ひなしの一六荒手をきりかへ押寄すれば、さしも押しづよに固めし備も大崩れにくづれ、遂に落城とぞ

かくごの前は思はぬ難儀にあひ給ひ、幼き時隨ひしぉんば日傘も散り〴〵になりければ、かゝる時引摺りと言はれんも口惜しく、小褄かひ〴〵しく自ら手鍋をさげ、思はずも肌薄にて落行き給ふ。

めのとまゝ上は御臺の御供申し、手にたつものをぶち殺し、寄せ來る掛取をうち拂ひに拂ひ、やう〳〵一方をきりぬけ、わが故郷へ御供する。

「上見れば及ばぬ事の多かりき。此の笠を召して世をぉ凌ぎ遊ばせ。おいとしやぉいとしや」

「これからは其方一人が便りじや」

「浮き沈みも世の習ひ、こよひは天德寺へ志し、反古張りの辻番で夜をぉあかしなされまし」

ひろむねが見かけし山の要害いづれも落城する。

御臺所の住み給ひし勝手口といふ岩は、少し要害はかばかしくも見えざれば、こゝへひた／＼と押寄せ、矢庭に算盤の玉藥つよくはじき立てて取りはたりければ、俄の難澁上を下へと騒ぎける。日頃御臺のそばに仕へけるまき江の兄弟は鏡山に陣を張り、玳瑁の鬢さしをまげ之に手づるを張り、しのぎを削り、櫛笥手箱の面々同じ小枕に討死せんと働く。

まき江の兄弟、手當り次第手道具をぶつつけ防ぐと雖も、ついくづは五左衞門が爲に見倒され、はかゞ〳〵しき軍も無くおしまひなり。

掛取勢押寄すると聞えしかば、ひろむねの陣中大きに騒動して、軍大將につき勘定すみかた、錢屋小路に砦を搆へ、幕をきつて留守をつかひ、鼠喰ひ存ぜずと書いたる塗板眞先に押立て、當時いちざるゆかたの面々を一手になし、一拂ひ追拂はんと擬せられける。

各頭痛鉢巻にて相詰め、小田原相談をぞしたりける。工面のなりたけ、くわんぜより十文字にとつて打懸け、あげさげしたる上帶引締め、先陣に進んで立てきらんとぞ進みける。

「たとへ借金の山にのぼり、すてつぱろを放すとも、そうは虎の皮の陣羽織を着し、うその川を渡さば、下馬の流るゝを待つて、よりくに引倒すべし」

掛取勢の先陣くづは五左衛門古金と名のり、厚皮づらの革財布かさ高にしよひなし、縄もつこうの指物、九尺二間の天びん棒元手つまりにかい込み、寄せ来る敵をちぎりにかけて見倒さんと、かせぐに追付く貧乏人、どうだ宿六、お助けはんぜう、はつち神乞ひ、太郎兵衛あいびやれ、くふやくはずの面々、爪に火ともすたそがれ時、かせげやかせげとゆふ飯の、箸を置くべき暇もなく、あせりにあせつて押し寄する。

くづは五左衛門古金柳原の先陣する、

「ばくやがふるぎのきれ次第目に物見せん」

に陣を張り、一條の大ばん所つぎなりと名のり、けいする不順と書いたる二布の大旗まつさきに押立て、塵紙のやしろを右りへとり、惣雪ゐんの裏門口を塞ぎけり。

掛取勢こわたか山につけのぼり、敵を目くぼく見くだす。

すは一大事と聞くよりも、まづ一番につめたかん平朝おき、しわん坊よく心は、あだちが原に陣を取る。塗りごめ篠の飯櫃に大たま杓子の指物、冷飯太郎すえやすと名のり、尺長ばしを切つて落し、手のくぼの口々を塞ぎける。おかべのから太郎むねはるは、水もちを通りかね、下つぱらにぞこたへたり。

むねひろの居城なんどうの櫓、石で手をつめたり。

ひろむねの諸軍勢さんだんのちやかもぎをひき、たてごかしにせんと待ちかけたり。

手ばなかん平もりよしは、はな水橋にひつかへす。ぬきでのわた太郎ゆくすゑは天徳寺をかためつゝ、春の流れに下馬の裾をひたして利息をかため、ふぐりの越中太ふんどしはのしこし山

麥のかろぢせろ〳〵ありかね。

麥のかうぢせろ〳〵ありかね、此由を聞き給ひ、其要害を堅固にせんと、利分の石垣高く、慾の空堀深く、其身は三重の炬燵櫓にのぼり、こゞえたる武者には辻番にかゞませ、無鐵砲に鼻藥をかひ、五分でもすいたる所なければ、今は心安しと、さろかう院の貧窮阿闍梨を召され、貧乏神に祈りて盆と正月をいどに祭り、この時困窮九年を改め勘略元年ととなへける。

さろかう院の貧窮阿闍梨、盆と正月の祈りをせんと、たんせいをこらす。

「なまけは損だばかもんだ。そなたはうんつくたかいもの、はつたらどこでもねがさがつた。ぼんぼん〳〵は正月ばかり」

あはの御前。

大将小鍋粥のかみうはずみ。
お寺のなつとう太たゞとり。
やきみそう太郎すみなり。
軍勢催促の仕切判。
書出しの矢文。

掛取の城の大將こなべ粥のかみうはずみ、日頃ひろむねが寛濶を憎みければ、丁太が内通時に取つての吉左右と大きに喜び、いで〳〵せきばんに押しつめ一攻めによりたてんに、落城は此時を過すべからずと、やきみそう太夫すみなりといふ者を使者として、峯のかうぢせう〳〵ありかねの方へ後詰を乞ひ、尚父お寺のなつとう太たゞとりを使として、諸國へ軍勢催促にぞ出されける。

物見のつはものよしのずゐより天井をうかゞふ。

いくさ大將ちりはうきの守、采配を取つて下知する。「よくの川深き時は算盤橋をかけ、から鐵砲をはなさば、上手の幕を張らせ、流るゝ質には利息を取らせ、八ケ月限りに落城させん。兩人急げ〳〵」

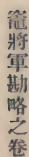
めつぱを廻すところ。

「めつぱひいやろ〳〵」

臺所奉行小づかひ丁太郎ひととおといふ者、忽ちうらがへつて、此由を掛取の城へ内通せんと、二二天作が方へ一々申し送る。

「掛取の城主こなべ殿へこの通り申上げん。それよそれよ」

土用布子「さて〳〵暑い事。貴公はさぞお寒からう」

寒帷子「さやう〳〵。御挨拶かんじ入ります」

次第に奢りを極め金銀を湯水の如く遣ひ、横に車を押させ、臺所にめつぱを廻させ、家中の面々土用布子に寒帷子にて相詰めける。この時百の口を十六文抜いて通用させんと評定する。

「ゆふべはお庭の藪へ馬鍬ひきかけてお遊び遊ばしましたとさ」

金銀を湯水の樣につかふ、

「新吹を二杯ばかりうめてくりや」

西の國百萬石の太守だゝら大臣ひろむねといふ大將ありて、生れつき取りしめなく、日夜奢りに長じ、荒淫亂酒に耽り、食は山に綱し海にすなどり、榮耀にあまり、近習のものに言ひつけ餅の皮をむかせ、石を抱いて深き淵に臨み、薄氷を踏ませ壁に馬を乗りかけさせて、其危きを樂しみける。

鍋釜羽根がはえて飛ぶ。

めんどりときをつくる。

「鳥飼より紅屋のは薄皮でむきにくい事だ」

竈将軍勘略之巻
下
通油町
板元
重
可候作

さても法性寺の入道のいきさつ毎日々々同じ事ばかり言うて一向に埒があかざりしが、漸く大晦日限りにいいやつと埒があき、つろだ左衛門も元の如くに御首尾よく、めでたき春をぞ迎へける。

「法性寺の入道前の關白太政大臣樣の事を、法性寺の入道前の關白太政大臣殿といつたれば法性寺の入道前の關白太政大臣樣が大きにお腹をお立ちなされたによつて、今度から法性寺の入道前の關白太政大臣樣の事を法性寺の入道前の關白太政大臣樣と言はうやのふ。法性寺の入道前の關白太政大臣殿。是はしたりそうじやア無かつた、法性寺の入道前の關白太政大臣樣、なんぼ春永でもかへしては言はれぬ。先一盃たべて申さう」

「一息には中々言はれぬ、チヽ息がきれた」

「此本の仕廻を見さつし。法性寺の入道樣を夏書にした樣だ」

芝全交戯作

様といふ所を」
女房「お咄の中でござりますが、私も女でこそあれ三なめかけた三かけたびつちく鐵砲ほうねんぼうのつうだ左衛門の尉鼻長と申す名の長い夫を持つて居ります。たとへ法性寺の入道前の關白太政大臣殿と申しても」
嘉「いえさそう言つては濟みませぬ。法性寺の入道前の關白太政大臣」
つうだ「いやそれでは聞えませぬ。法性寺の入道」
四人わや〳〵「いやさそれでも法性寺の入道。いやさ道成寺の入道。はて道成寺の入道は坊樣でござる。それだから道成寺の入道は京鹿子でござる。何さ法性寺が道成寺でござる。何さ法性寺。是はしたり、道成寺法性寺。それ又道成寺。どうだほうだ〳〵〳〵〳〵」
「今日はお内樣だけわけていざこざがこぐらかりました」
「斯う申すものの何の事か一つも分りませぬ」
「成程分りませぬ、又明日の事に致しませう」

嘉兵衞「さて昨日の申しかけを申さうと存じて今日も貴宅へ參上致しました。長く申しては事が分りませぬ、つまんで申しませう、斯うで御座る。そこ許樣が主人法性寺の入道前の關白太政大臣樣の事を、法性寺の入道前の關白太政大臣殿と仰せられましたから、そこで以てからに何か法性寺の入道前の關白太政大臣樣が大きにお腹をお立ちなされ、おれが事を法性寺の入道前の關白太政大臣樣といふ害を、なぜおれが事を法性寺の入道前の關白太政大臣殿と言ふたとて、そこで以てからに法性寺の入道」

つうだ云「まづおせきなさるな。然れば拙者が法性寺の入道前の關白太政大臣殿の事を、法性寺の入道前の關白太政大臣殿と申したがお氣に障り、法性寺の入道めが腹を立つて」

嘉「いえさそう仰せられては濟みませぬ。法性寺の入道前の關白太政大臣

關白太政大臣様がお腹をお立ちなされ」
つろだ云「先ちとお待ちなされ。左様ならば拙者が主君法性寺の入道前の關白太政大臣殿の事を」
嘉「それ〳〵其口の下から又殿と仰せられた、それだから法性寺の入道前の關白太政大臣様がお腹をお立ちなさる」
つろだ云「然らば拙者が法性寺の入道前の關白太政大臣殿と」
嘉「いえさそうでは御座らぬ。法性寺の入道、是はまづ今日は是ぎりに致しませう」
「お互にせまじきものは宮仕へと申すが、主人の名が生長い名でござるから宮仕へばかりでは御座らぬ、山門へも鳥居にもつかへます。又明日の儀に致さう。ア、口がくたびれました」
「五日や十日では此理窟は分りますまい」

つうだ左衛門此度の御用思ひの外口の廻りあんばいよく勤めける故武具馬具を拝領し、いよ／＼首尾よろしかりしが、つうだ左衛門そそかしき人にて、ある時主君法性寺の入道前の關白太政大臣樣の事を、法性寺の入道前の關白太政大臣殿がどう召さつて斷う召さつてと、少し乘りが來た故か横柄に申しける故、大に御腹をも立ちなされ、御家老親も嘉兵衛子も嘉兵衛の兩人を以て屹度仰せ付けらるる。

嘉兵衛云「そこ許樣は如何の粗忽で御座るか主君法性寺の入道前の關白太政大臣樣の事を法性寺の入道前の關白太政大臣樣と仰せらるべき處を、如何の譯で法性寺の入道前の關白太政大臣殿がどう召さつて斷う召さつてと仰せられた　そこで以てからに法性寺の入道前の

を言ひそうだ」
「序に奥様へ申上げます。のら如來〳〵三のら如來六のら如來、一寸のお小佛におけつまづきやるなと仰せ付けられましたが、おけつまづきやりは致しませぬ」
「奥様の御前でおけつまづきやるなは無躾な樣だ。おゐどまづきやるなでよさそうなものだ」
「扨々共方が日頃に似合はぬ口のまはり樣恐れ入つた。共褒美として武具馬具武具馬具三武具馬具、合せて武具馬具六武具馬具を取らせう」

ほうねんほうのつうだ左衞門、おもいれにしやべりならひ、エヘン〳〵とせきばらひ高慢に申上ぐる。

「京の三十三間堂の佛の數が三萬三千三百三十三體ござると申すが、誠に三萬三千三百三十三體ござると、チヽさて誠に三萬三千三百三十三體ござります。其もどりに山王の櫻の木にお猿の數が三萬三千三百三十三疋ござると申すが、是も誠に三萬三千三百三十三疋ござるか、チヽさて誠に三萬三千三百三十三疋、兩方合せて六萬六千六百六十六體六疋、佛とお猿とすつたかもんだか、やつたか取つたか、くつたり飲んだり、ひつたり垂れたり」

「これ〳〵大概にしてやめませい。どうかとんだ事

「私は足にふみ豆踏みたてふみさんしよが出來ました」

三なめかけたか三かけたひつちく鐵砲ほうねんほうのつうだ左衞門は、やう〳〵一年半程かゝつて、京の三十三間堂の佛の數と山王の櫻の木のお猿の數との實否をたゞし歸宅するこそめでたくも何とも無し。

つうだ左衞門殿は地體口不調法、其癖物覺えの惡い人なれば此度の御用誠に大役にて、忘れぬ爲とて長の道中を珠數を繰りながら、京の三十三間堂に佛の數が三萬三千三百三十三體ござると申すが、誠に三萬三千三百三十と唱へ〳〵あるかるる。

「お身たちはよくよう其樣な事を申しならつた。身どもはすきと口がまはらぬ」

「そなたの脚絆も革脚絆、我等が脚絆も革 脚絆だが、大分破れた」

奥様のお錠口へ来る使の者商人も、むつかしい事ばかり言つて居るから、二日や三日では埒があかず。

「あかさたなはまやら様の女中、おこそとのほもよろ殿に御目にかゝりたうござります」

「青竹茶筌様の御宿から、ぼん豆ぼん米ぼん牛蒡が参りました。サア事が面倒だ」

お厩のまや介濡手で濡わらちよともて來やれの御用を仰せ付けられけるが、まや介馬鹿律義なる者にて、馬の股に稾一本、馬の股に稾一本といひながら拾ひける故、めつたには埒あかず。馬は物は言はねども、人のまたに一本人のまたに一本とさげすんで居る。

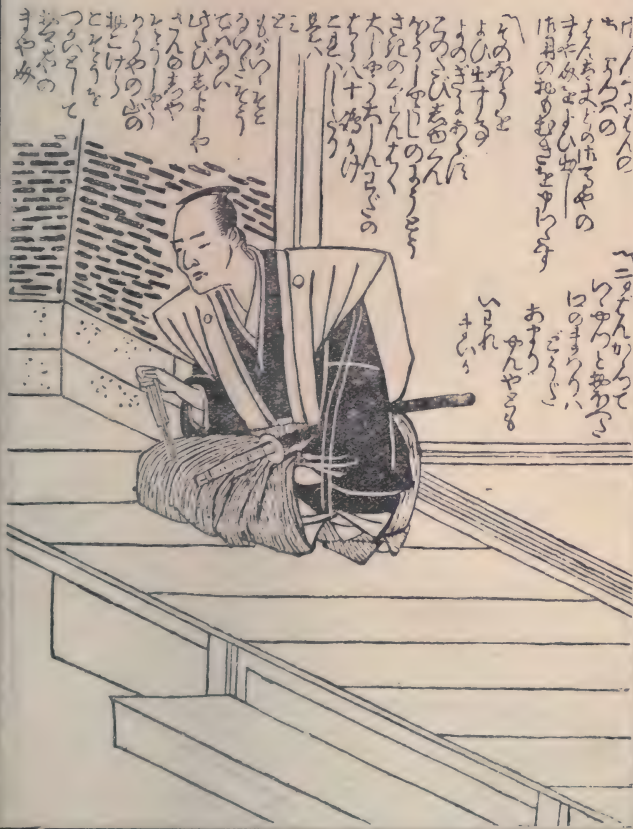
「馬のまたに稾一本、〱〱〱〱〱〱〱〱、〲〲〲〲〱、ひよつと言ひそこなふと大口だ」

れまいか」

御玄關番の雨合羽の半太夫殿、御厩のまや介を呼出し、御用の趣を申し渡す。

「其方を呼出す事餘の儀にあらず。此度主君法性寺の入道前の關白太政大臣わだの原八十島かけ、是はしたり是は身共が言ひそこなひだ。そうではない、此度書寫山のしや僧正、高野の山のおこけち小僧を使として、お厩のまや介濡手で濡葉ちよともて來やれとのお賴みぢや。早う差上げてよからう」

「私も只今ぶんぬきをたべかゝつて居りましたが、急な御用とござりますから、小米の生噛み〳〵、こん小米の小生噛みに致して參りました」

「二晩かゝつていふやつと覺えた口のまはりはどうだ。餘りやんやとも云は

「小鍋に小味噌がこぁがらずこすくてこよこせ、面倒な事ばかり言はつしやる」

法性寺入道様がとんだ事をいふ事がお好きなれば、御臺所下々の仲間出入の町人迄、互に言ひにくい事を言つてつき合つて居る。どうでもお臺所だけ忙がしそうな事ばかり言つて居る。

「今晩は京の牛鱈ならなまゝな鰹を召しあがる筈じや。定めて後段な蕎麥きりそうめん」

「これ八百屋、昨日の胡麻は眞胡麻からか犬胡麻からか、つみ豆つみたてつみ山椒を今持つて來やれ」

「チット合點だ心得田圃の川崎神奈川、大磯がしや小田原町まで走つて行きやす。どうだ〳〵、きついものか」

ろが口も萬更でもあるまい。併しかうはいふものの、茶の方ばかり遣つて田の方はやらぬ積りだ。茶はほんとうの茶で田はもどけつこだよ」

「まろは前の關白ではない、がきのわんぱくだ」

「かやうに茶になし下され有難う存じます」

「關白様も妙にも吝いぞ」

扨も親嘉兵衛子嘉兵衛の兩人は向ふの鶴の首を詮義してあざやかに申上げる。

「親も嘉兵衛子も嘉兵衛親かへ子かへ申上げます。先達て向ふの鶴は白鶴首か黑鶴首かと御尋ねにござりましたが、あれこそ本の眞黑々の黑鶴首よ、七草なづな唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬ先にストトントンよ。何ときつい物でござりませう。あとの七草なづなはおまけで御座ります」

「汝等親子が口の廻る事恐れ入つた。然れば其褒美として田一反に茶一斤、田二反に茶二斤、田三反に茶三斤、田四反に茶四斤、田五反に茶五斤、田六反に茶六斤、田七反に茶七斤、田八反に茶八斤、田九反に茶九斤、田十反に茶十斤とらせう。何とま

ぎりにしてお歸りなされまし」
「向ふのなげしの長薙刀はたが長薙刀か聞いて見たいものだ」
などと折介まで言ひたがる。

又ある時法性寺の入道様の御玄關へ高野山のおけら小僧殿參られ、長口上を申し置かるゝ。

「拙僧儀は書寫山のしや僧正の使僧高野の山のおけらこぞうで御座りますが、法性寺の入道前の關白太政大臣樣へ左樣仰せ上げられて下され。近頃申し兼ねましたが、お大事の物ながらお厩のまや助が濡手で持ちました濡薫をちよと二三本拜領致したいと仰せ上げられて下されい」

「私も玄關番の雨合羽の番合羽を着かへまして只今やろ／＼罷り出ました。かやうな御口上は五六日も稽古致さねば申上げられませぬ。もう一遍御口上仰せられましと申しましやうが、それでは日が暮れませう。先今日は是

扨もつろだ左衛門は、奥様の御口上の返答に行きつまり、ぐつともすつとも息のねも出ぬ所に、女房は大の口まめにて夫の名代に奥御殿へ上り、ぺちやくちやぺちやくちやとしやべり立てる。

「夫つろだ左衛門事、奥様の御用で召しましたが、どう致しましたか半袴のしつかは袴にしつぽころびが切れまして、三針針長にちよと縫ひちよとぶん出せと申しますが、埒があきませず。其上内の前の細溝にどぢようによろり鰻のろりにどぢよによろりのらり〳〵ぬらり〳〵致しまして急には上られませぬ。先は其爲口上左様に」

「夫つろだ左衛門もどうも口がまはりませぬ。くびの廻らぬには劣りました。ヲホヽホヽ、」

「今では御借金もござりますまいに、なぜ御頸が廻りませぬか、お氣の毒や。エヘヽヽヽ、」

さても御局の河原撫子のせきちく殿は、やうやく四五日かゝつて奥様の御口上を覺え、ほうれんほうのつうだ左衞門が方へ御使に參り、あざやかにしやべり立て、外に御用もござれば御上りなされましと言はれて、つうだ左衞門返答に當惑する。

「拙者などは、京の三十三間堂の佛の數さへまだ覺えませぬにかやうな御使、いやもう年がよりましては根が薄うなりまして、こんな事は出來ませぬ」

「私も此間うち此の御口上にばかりかゝつて居りまして、地口を一つ申す間が御座りませぬ」

「わたしらもせめて向ふの塀に九穴一つでも言ひ習つて、御褒美を頂きたい」

お錠口の取次の女中は、ややう親も嘉兵衛子も嘉兵衛が口上を覺えて、殿樣と奥樣へ速かに申上げければ、さて〳〵其方はよう言ひにくい事を覺えたと御感心遊ばし、其儀ならば奥が大つみとまろが大まりといざや大まり大つみくらべはやめにしやうが、其代りに、向ふの鶴は白鶴首か黑鶴首か、あれこそはんの直黑々の黑鶴首か白鶴首か見て參るべしと、親も嘉兵衛子も嘉兵衛親かへ子かへ兩人に申付けてよからう。何ときついものか、ア、口がくたびれた。ちと休まう。

「お主はよく口が廻る。其褒美に繻子緋繻子繻子繻珍の帶を取らせう」

「是程に申上げまするは、並大抵の事ではござりませぬ」

「お咄の序でござるが、今朝召使ひの錢駒めがはだしで逃げました。小遣に困ります」

又ある時法性寺入道樣は奥樣の大つみと船樣の大まりといざや大まり大つみくらべ遊ばさんとて御家來に親も嘉兵衛子も嘉兵衛といふものあり、此兩人にお手傳を仰付けられ、この御使の口上も五六日かゝつていゝやつと濟みけるが、兩人お錠口へ來かゝりて女中へ申すは、如何なくゞり戸もくゞりくゞりくゞつたが、お錠口のくゞり戸はくゞりにくいくゞり戸でくゞられませぬからあがりませぬと、親も嘉兵衛子も嘉兵衛親嘉兵衛子嘉兵衛子かへ親かへともに申しましたと仰せ上げられて下され、と賴む。

「其通り申しならひまして明後日あたり申上げませう」

つていふやつと仰せ付けらるゝ。
「今朝油揚をたべたせいか、今日は大分くもじがすべる。晩には風車のおかごを申付けやれ」
「御口上の趣を二晩さらひますが、まだ申されませぬ」
「奥様はたしか小田原の外郎からいらしつた」

こゝに又法性寺の入道前の關白太政大臣樣の奥方を菊桐菊桐三菊桐合せて菊桐六菊桐の前樣と申すは、これも物の言ひにくい事や聞きにくい事がお好きにて、お局の河原撫子のせきちくといふ女中を召して仰せらるるは、此度三なめかけた三かけたびつちくでつちくはうねんほうのつうだ左衞門事、殿樣のお使に京の三十三間堂へ參るそうな、若し多くの佛の其内に、のら如來のら如來三のら如來六のら如來とてのらものの佛がある、必ずこれを讀み込まぬ樣にしたがよい、又其そばに一寸のお小佛があるによつて、お蹴つまづきやるなと申すべし、外にも賴みたい事があるによつて參るべし、と使をやり給ふ。

上つがたに似合はぬ口まめな奥樣なれど、三日程から

せられ、一日に濟みきらず日が暮れてやつとすみ、お夜食をあがつた所が九つ過ぎぞ有難き。何で有難いかどうも氣が知れず。

「まろも大きに口がすくなつた、ちと休んで言はん。お身も烟草にでもしやれ」

「尾籠ながら私は手水が漏る樣になりました」

こゝに法性寺の入道前の關白太政大臣樣と申すは、物を丁寧に聞き給ふ事がお好きにて、ある時御家老の三なめかけたが三かけたひつちくてつちくほうれんぼうのつうだ左衞門といふ者を召して、京の三十三間堂に佛の數が三萬三千三百三十三體ござると申すが、誠に三萬三千三百三十三體ござるか見て參るべし、其序に、山王の櫻の木にお猿の數が三萬三千三百三十三疋ござると申すが、これも誠に三萬三千三百三十三疋居る事か、實否をたゞして參れ、と仰せ付けらるゝ。頃しも十月中の十日の事なりしが、丁寧なる御方故、おつくりかへし、ひつくりかへし、三十遍ほど仰せられける故、丁度山王の櫻の木のあたりでお晝ごぜんを召上げられ、其から又あとを仰

形容化景唇動す
作者 芝全交
下
板元通油町
つるや

斯くて天帝は、世の中を彌勒佛に渡すはまだとち億萬年も後の事、人間の風俗ばかりは直してくりやれと頼み給へば、彌勒佛受合ひ給ひ、かのしやれた手合を集め、雛の古いのをこそくる様に彩色をし直し、衣裳を着せかへた人間は、即ち此繪の通り少しもしやれのなき世の中と成り、若やぐ春ぞ、勿論しやれずやつぱり古風に、めでたし／＼。

「よいは／＼」

此時隅田川の渡守もかけ烏帽子を着て舟を漕ぐ。

京　傳　作

菊　亭　主　人　畫

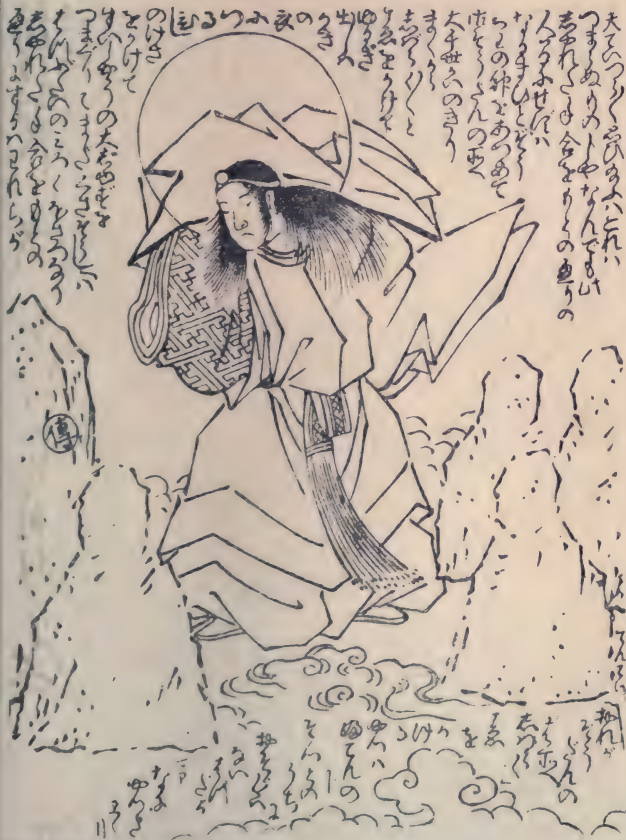
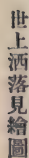
誰もねつから嬉しがられば、之を今に彌勒しやれぞんと申し奉る。

天帝「おれが相談の場所へ暫くと　をかける奴は、普天の下率土のうちに恐らくは無い筈だが、マア何奴だヱ、引」

京傳こんなつまらぬなりになつても氣ばかりはやつぱり強く、おんなじ樣に何奴だヱ、といふ。

「我を誰とか思ふ。姓は慈名は彌勒字は阿逸多、見知つて下せえ。ア、つがもねえ」

天帝つら〳〵思ひ給ふは、これはつまらぬものじや、何でも此しやれた手合を元の通りの人間にせずばなるまいと、造化の神を集めて御相談の處へ、大千世界の切幕から、暫く〳〵と聲をかけてゆるぎ出でしは、かきの衣に鶴菱の袈裟をかけて、水晶の大數珠をつまぐりて、まだくさ草紙へは初舞臺の彌勒菩薩なり。しやれた手合を元の通りにするは我等が受取り、サア〳〵我等に渡し給へ、と宣ふ。常時繁昌北廓青樓意氣はつかうてんちてんつんのすががきに、浮れ出でたる大通佛、大千世界の花道の、こなたに安置し給へば、一番待つてくれの鐘、盆前の金つとめの金、うちにうつたる鑼ねうはち、遠からんものは音にも聞け、近くはよつて彌勒菩薩の御せりふ。

「これはどうだ、秀郷と思いしやれを言つたら又半分しやれて來た。しやれがかうじて物狂ひと言つたらみんなしやれて仕舞つた」

「過ぎたるは及ばざるが如しと古語の通り、味噌の味噌臭きこそ黑けれど、武士は武士臭く、町人は町人臭きがよい。しやれ過ぎるとみんなそうだ」

たとへば海にある貝殻のしやれる様なもので、はじめは榮螺や鮑の貝なれども、かうでも無いあゝでも無いといふ潮にもまれ浪にうたれて、終には何だか分らぬ形になつて、がら〳〵一文一文にほかならぬ、人の事ばかりでも無い、くさ草紙なども餘りしやれると本意を失ふ、汝はしやれぬと思へどそれ見ろ、とて天帝の天眼の鏡にて見せ給へば、京傳がからだも段々しやれて來て、遂に朽木の樣になる。

京傳曰く「人の事ばかりめくじら立てゝ、おれはしやれぬ〳〵と思つて居たが、これはたまらぬ、もう半分しやれかゝつた。誰ぞとめてくれ〳〵。

天帝「おれもとめてやりたいがおれがにもどうも仕方がない。しやれての後の御料簡さ。

しやれだと思つて本を忘れるやからが多いから斯うだ、何と珍らしい物を見たらう、と宣ふ。

「是を柳橋の珍物茶屋か、兩國の唐の開張へ出したらどうで御座りませう、とんと金澤の蛇木といふもんだ」

「次郎どんのいろと、太郎どんのいろと、みんなしやれて仕舞つた」

太鼓持のしやれたの。通人と女郎のしやれたの、こんなつまらぬなりになつても、やつぱりしやれを言つて居る。

「世の中の野暮めらは、斯ういふひねつたなりは知るまい」

「こんな意氣ななりの流行る事は知りんせんのさ」

天帝は京傳を同道して何處ともなく行きけるが、一つの海のはたの様なる處へ出でそこらを見れば、土にもあらず石にもあらず木にもあらず、如何にも朽ちたる一塊りづつになりたる物いくつもあり。天帝宣ふは、是が皆しやれのかうじたものぢや、此一塊りづつになつたものが、武士百姓職人商人儒者佛者神道者醫者俳諧師、藝者太鼓持、其外色色の人のしやれたのじや、中にもいつちよくしやれて居るのが通人と女郎のしやれたのじや、何とそれとは見えまい、斯うでもないあゝでもないと段々しやれしやれして、遂にはこんな分らぬ物になる、今時のしやれはしやれでは無くて皆行過ぎだから、本意を失つて此様にはじめの形をなくして仕舞ふ。無性にしやれだ

か。勝手が知れませぬ」

天帝宣ひけるは、こゝは差詰め汝が夢の中にあらはるる場所なれど、かゝるしやれの世の中にそんな古い趣向と出かけては、凡夫らにすこたんと思はれるも殘念故、白化けに來たりし也。さて汝此頃世の中のしやれたるくさ草紙を作ることを知つたる故、しやれのとゞのつまりを見せんため來りし也。早くあれと一緒にあゆべ、又見物が夢だと思つては惡いから、もしねぶそうなら篤とよく目をさまして歩びやれ、と天帝もどけまじりに宣ふ。

「去年の惡だましひは大分受けがよかつた」

「今年も又惡魂の後編、かんじんが一心といふ本をあらはしました。御覽じませ」

「何ぞ御馳走致したいが、天帝樣は何をあがるもの

かくて京傳は、かの世の中のしやれて來たくさ草紙を中の卷迄かき、末の工夫をして居る處へ、草の戸を叩く者あり。京傳聞付け、ハハア葛屋のあるじでは無きか、くさ草紙の作の催促ならまだやう／＼中迄出來て下の卷が出來ぬぞや、といへば、いや／＼其樣な者では無い、我は去年も汝が筆に度々書かれたる天帝なりこゝあけよと宣ふ。

「手前のうちを天てい尋ねたこッちやアねえ」

「羅月さんでは無いか。但し吉原の掛取か。僧は叩く月下の門、おい／＼と言へど叩くや雪の門といふやうな風流な所ではあるまい」

雷などもしやれて來て。人間がやかましからうと、隨分小さくなり、たま〳〵おつこちた時は其近處へ義理をのべて天上する。

「かみなりめで御座ります。只今はおやかましう御座りましたらう。お隣ではお留守さうに御座ります。憚りながらお序に雷めが御挨拶に參つたとおつしやつて下さりませ」

と中々律義なもの也。

「チ、雷殿か。御苦勞でござる。いやはや今の夕立で暑さを取返しました」

雷の荷拵へ、米搗が仕辨つて踊る樣な身也。

犬「何でも十五よこされえとぢきにわんだナそれよしか、わん〳〵わんわん」

泥「コレサ頭、そう吠えてくれちやアわりイ」

と犬も泥坊も互に如才はなし。

「貴様の先祖は桃太郎に黍團子を一つ貰つて鬼ケ島まで供をした。それから見れば五つでも高いものだ。ちつと古いが、わしは燒飯やる氣ぢやけれどさい〳〵、おめえ犬の性で吠えなさる、犬のこさい〳〵猫の子さい〳〵」

「桀狗吠堯といへば、人を吠えるが、おいらが役だ。所を吠えぬからひねるだらう」

と此犬中々こしやく也。

昔は泥坊も黒裝束目ばかり頭巾なぞといふ甲斐々々しき出立なりしが、今はしやれてじん〳〵ばしよりに京草履、店者のしくじりが虎屋の五種香賣りに出た樣ななりなり。昔は犬も泥坊と見るとやたら無性に吠えしものなるが、これも段々しやれて來て頭からは吠えず。

犬「コレ泥州、今夜は燒飯幾つだ」

泥坊「五つばかりで負けてくれやれ」

犬「とんだ事を。おのしは氣が違つたそうだぜ。おれも此町内ぢやア相應に吠えて番太郎にも立てられる犬だア。おのしも又どこ無宿何小僧と名の通つた泥州だ。そんなちやかしを言はずともつと出さつし〳〵」

泥「どうぞ是で不承して啼きやんでくりやれ」

或は男が血の道の藥を飲み、下戸が水雜炊を食ひ、こいつは洒落だらうと嬉しがる。

「これは中橋のまきや藥か。アヽ血の道の藥は野暮てねえ奴だ」

「水雜炊は意氣なものだ。諸事此事だ。うまいうまい」

「これでおいらが樣な下戸と餅を食ふ上戸と丁度入れ合ふだらう」

「あきれけえる程あがりますよ」

さる程に我勝にしやれて來て、二三月時分からまだ蚊になりもせぬぼうふりが出て人を食ひ、又鰻になりおほせもせぬ山の芋のうちから蒲燒にして賣る新見世が出來る。

「今歳はとんだぼうふりの多い年だ」

山の芋の蒲燒見世へ俗は餘り這入らぬが、坊樣は幾人も食ひに來る。これ鰻のかけ富をつける心意氣との事なり。

はきといふものだ。もちで樽がちよいとまつて居るからよからう」
「竿のさきへ鈴といふは聞いたが、竿のさきへ樽は新らしい」

昔は鳶が油揚をさらふとて酒屋の御用の手を引かきしものなるが、かゝる大洒落の世の中なれば、今は鳶もしやれて來てそんなさもしい事はせず、肴賣の手前から三貫四貫する初鰹を高錢出して買ひ、雲の上にて飲みかける。其鰹の頭を人間がさらつて食ひはどうだ。

「芝の山の尻きりとんびも呼びにやればいゝ」

「しかし酒を買つて尻きりとんびは、ちと見得が惡いの」

「アヽ風を引いた。ちんちん」

折節鳥さし來つて之を見付けしが、寒鳶なら錢にもなるが夏の鳶は五文にもならぬと目はかけざりしが、鳶が餘所見をして居る所を見すまし、側にある貧乏樽をちよいとさしておつ取る。

「おれが身は、輕業師の煤

下駄を入れて置いたがゐつせんよ」

此客の箸紙へ夜の殿さんと名書きして置くなどはしやれたもの也。

「今時の人間の客衆は、甘い酢ではいきんせん。それだから内證でもやつばり主達の樣な客人を嬉しがりんす」

「コレあの子や、此の金の木の葉にならぬ内早く質屋へ持つて行つて先度の襦袢と鏡を受けて來や。ちつと氣を利かせや。遲くなると木の葉になるぞよ。先で木の葉になつた分にやア構やアしねえ」

狐は段々しやれて來て、きとてもばかすなちよい女郞をばかして遊ぶがましと、色男にばけ女郞買に來る。女郞も又其上を大しやれにしやれて、きつ印といふ事承知で客にする。

「もしえ、そんなに遠慮しなんすな。主はこん〳〵だといふ事はわつちもとうに承知で居んすけれど、はておきつさんでも何でも客人に二色はおつせん。又此床花におくんなんした金も定めて木の葉でおつしやうが、木の葉でも何でも金の通用さへすればようおす。主はぜんてへ律義だよ。やつばりこれから白化けに來なんし」

といへば、流石の四足も大にへこみ、洒落には上手のある物と感心する。

「此の引出しへわつちが駒

狐なども大洒落にしやれて來て狐の方からわなをかけて獵人を釣る。これらはどうか哇らしいけれど、深川の壬生狂言や髪結床の障子にも出て最饒なる事なり。かるがゆゑに今は騷ぎの三味線にも、狐を浮かそこんこんちき〳〵こんちきちとは言はず、獵人浮かそ獵人ちき〳〵かりちきちと手重くはやす。

「二百文とはこいつ有難山下で鐵砲が放せるわえ」と獵人に似合つた洒落をいふ。

「アヽかうもあらうか。見渡せばづくと小錢をこきまぜて二百ぞ春の二朱きなりけり」

狐曰く、

「さて〳〵獵人の洒落といふものは聞いて居られぬものだ」

さる山寺の和尚、毎日々々地藏菩薩の本堂建立の勸化に出でしが、本堂のたしにはせず、ろぬが身の下の建立や臍の下の建立にばかり遣ふ故、本尊の地藏尊思ひ給ふは、かういふ事では末末つまらぬ、此上はおいらを出さずにおれが自身に出やうと、辱くも地藏尊自ら勸化に出で給ふ。されば今は佛も人に助けられる世の中、とんだ洒落れたもの也。

「今泣うか〳〵おいらを出してむだ遣ひにされたのは一生の地藏そんだ」

「地藏樣もわが口から地藏菩薩本堂建立とも言ひにくし、又だまつてあるいては人が知らぬ故、據なく私の建立〳〵は有難てえね」

昔なら斷ろ石の地藏樣が出あるいては、やれ有難いの絲瓜のと俗物が騷ぐ場なれど、しやれた世の中故平氣にて、橋本町同然に思つて居る。

「トッテッチン〳〵」
「おいらはさつぱりこんな藝は持たぬから日待の晩にも隅の方にてれて居る。ア丶鳥にだも如かざるべけんやだ」

猿の藝や狆の輪くゞり、鼠が姉樣をくはへて來るなぞは古けれども、葺屋町の河岸で蝙蝠の輕業近年の洒落と思ひの外、そんな事ではなく見世物なぞも段々しやれて來て、鸚鵡が三芝居の役者の聲色をつかひ、きうくわん鳥が座がかり荻江の長唄をうたふ見世物が出る。なんとマア此上のしやれ樣もあらうか。

「東西々々、只今迄は人間が人間の聲色を眞似ましたが、是はよく似てからが出來そうなもの、私芝居の太夫は鳥で御座れば致しにくい藝で御座ります」

鸚鵡「序に出ますが市川高麗藏金升で御座ります」

「宵に降つたる雨上り、澤邊の葦のざわ〳〵と」

きうくわん「ふけて砧のなア音さへ床し」

昔ならお女のお開帳を拜みに親子連れでは遠慮なれど、そこがしやれた世の中、ぐつと平氣なものなり。

「ころんだ處で金を拾ふ守りもこれから出ます」

今時は開帳なぞも信心で參る者は少なく、やれ水茶屋によい娘が出るの、取持に役者が出るのといふ評判を聞き、それを見に參詣する事なれば、畢竟本尊は有りがひなしにて無くても濟むものと、これらも大洒落にしやれて來て、本尊は肩からやめにし、正面に美しい娘と色男を立たせ置き、又靈寶はまだるい〳〵といふて是もやめにし、又愛敬の守りや運の守り位はまだな事と、女郎買に行くと初會から惚れられてあつちから身上りをして呼ぶ守りや、富を付けると一の富二の富突きどめまで一人でせしめる守りや、百兩の支度金で嫁にゆく、も妾にすんで御世繼を生む守りを出しければ、老若男女貴賤群集して參詣する。何とマアしやれた世の中にあらずや。

に手を引かれ、押上の妙見参りの歸りの氣取にて出れば、見物がわつというて鳴りやまず、
「市川ありがたい」
「三升もまだ若いね」
「此次の幕は濱村屋の内ださうさ。已待で役者が呼ばれて來る所だとさ」

古語にも天地一番の戯場というて、芝居といふ物は元勸善懲悪の器なるを、いつしか大にしやれて來て、見物も理窟のある狂言よりは目先の面白い狂言を喜び、樂屋落ちを嬉しがる樣になりければ、段々しやれ〳〵して今は早狂言は一向にやめにして仕舞ひ、舞臺で役者の内を其儘正うつしにして見せければ、大入にてはめをはづす。

本舞臺三間の間、市川團十郎内のかゝり。團十郎素顔不斷着のこしらへにて俳諧の點をして居る。ほんとうの女房お龜奥より出て、このマア海老は何して居る事ぞと案じるこなし。トゞどりや縫物にでもかゝらうかといふをきつかけに、揚幕の中にて若旦那お歸りと呼はり、海老藏素顔にて、餘所行のこしらへにて升五郎

り、笛の音で按摩と知るは昔の事、今は人さし指を曲げて見せると、質を置く事と悟るは、なる程しやれた世の中だ」

「おんあぼきやアベエろしやのうまかもだら」

木魚の音に曰く、

「ポク〳〵〳〵タポー〳〵〳〵〳〵〳〵タコ〳〵ひだこ揚つたら煮て食はろ」

爰に畫草紙の作者京傳といふ者、例の無益の事に案じ入つて獨り机にもたれ居たる折節、草菴の前をしやれけんの繪圖〳〵と呼んで通りければ、京傳はたと手を打ち、アヽつら〳〵おもん見れば世の中の人心、斯うでもないあゝでも無いと無性に洒落れ〳〵して見た所の末は如何なるものになるやちんと獨りつぶやきしが、即ち一つの趣向となりければ、嬉しやさらば書かんとて、筆おつ取つてよりかゝり、既に草紙を綴りけり、トそれはさなきだ道成寺、これは茶な氣だチ、笑止さ。

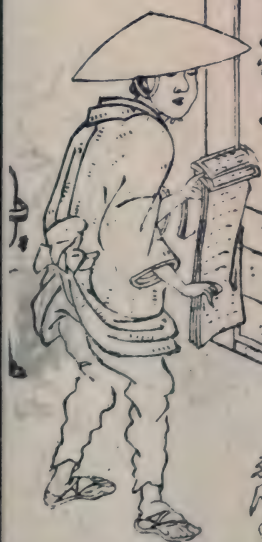
「親仁もしやれゝば息子もしやれる、娘もしやれゝばおんばもしやれる。しやれて〳〵しやれけんの繪圖しやれけんの繪圖」

「風鈴の音で夜蕎麥賣を知

洒落見繪圖序

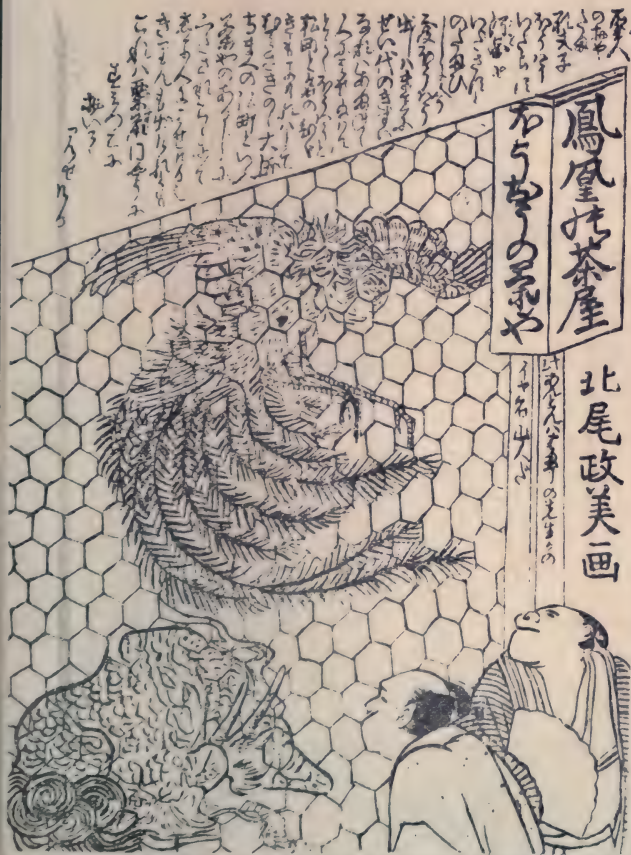
洒落難矣黄山谷云茂叔胸中洒落如光風霽月此洒落乎當世之洒落非洒落猶廡下扁螺房堂上猫兒屎之洒落乎悉皆失本意且行過而及觸頭於前十字番櫨也於戯洒落難矣

山東京傳識于菊亭

亥春
新鐫
世上洒落見繪圖
よのうちあやまとけんのゑづ
上
京傳戯作
通油町蔦屋板
不惜入馬骨叢

聖人の親玉孔夫子、鳳凰至らず河圖を出さずと宣ひしに、今度鳳凰出しはまことに聖代の奇瑞なれば、普く人に見せ給はんとて、鳳凰と弘町と名のひゞきもよければとて、紫野の大德寺前の弘町といふ茶屋のあるじに下され、こゝにて諸人に見せける也。麒麟も出でけれども、これは栗鼠同樣に隅つこに置いて見せける。

「此行燈は濱町の 先生かの」

「イヤ石川人だ」

北尾政美画

天下國家を治むるはいかのぼりを揚ぐる様なものといふたとへを、いかのぼりを揚ぐれば天下國家は治まると心得違ひをして、よい年をして我も〳〵とたこを揚ぐるに、鳶凧を友だちとこれも又心得違ひにて、まことの鳳凰來儀するこそ、げにも延喜の御代めでたかりけるためしなり。

君子は爭ふ所なし。必ずたこを揚ぐる時からませてのぼせ、くだして取る、其爭ひや君子なり。

「國主は百枚張りを揚げずばをさまるまい。五萬石以上は西の内八枚位でよからう」

「以上の衆は西の内、以下は半紙さ」

「何とびだこを見違へるものだ。聖代だから出たものさ。ほうわうあるいて見たが日本がいっちいい」

學問の道日々盛になり孝弟忠信の道盛に行はれ、此御代に延喜式延喜格の書も出來にけり。

菅公御作のきうくわん鳥のことばも、梓に鏤められ、普く世間に行はれる。

「菅公の御作のきうくわん鳥を調へたい」

「いかのぼりのお聲は面白う御座ります」

延喜の聖主菅公の賢匡房の大儒、斯くの如く合體しければ、月卿雲客より諸侯太夫庶人に至るまで、文を右にし武を左にして、此頃までは假名付きの四書五經を讀まれし者が、今では假名書きの四書五經へ眞字をつけて、さつ〳〵と誦讀する

「經濟には韓非子、飲むには劍菱の事だ」

「郭註莊子は又格別面白い」

「廓中よりは中洲の假宅の方が晴々としてよかつた」

「菅公は有難いお人だ、近頃での賢人だ。周公旦といふものだ」

「反魂丹の事かへ」

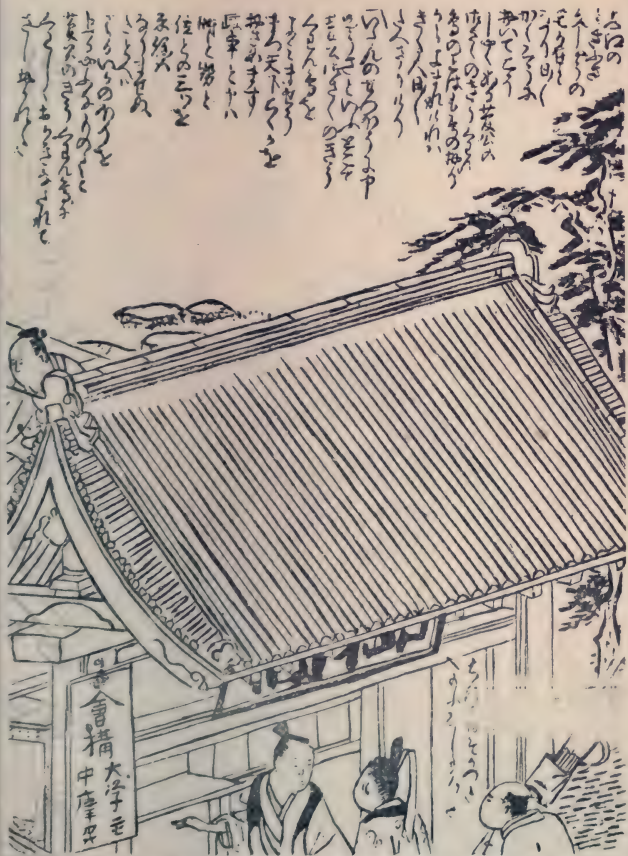
日々出席の者の名前を帳面にしるす。

「經書一枚が僅四ツ時毎日毎日の講釋にあはつしやります

大江の匡房文章の博士となり、日々學校に於て講釋あり。菅公の御作のきうくわん鳥の詞も其折から讀まれければ、聞く人日々絶えざりけり。

「ちつと遲かつた。もうはじまつた」

「いたんの說法に申すゆうさといふとこで、菅公御作のきうくわん鳥を讀みませう。まづ天下國家を治めます政事と申すは、時と勢と位との三ッを得ねばなりませぬ。たとへば春いかのぼりを揚げる樣なものだと、菅公のきうくわん鳥に委しくお書きなされてさし置かれた」

ここに大江の匡房とて文武二道の學に達し八幡太郎義家の師範となりし人あり。老年にて世をのがれ、安房の國に隱れ居けるを、菅公呼び出し給ひ、文章の博士となされ、諸人に聖賢の道を教ふべき旨仰せ渡さるる。

「旦那山人藝者衆多くの中で、不佞をお撰みは有難山のとんびかんたい」

最初から四角な文字ではとつかゝる者があるまい。四書も假名付きの諺解などがよからう。この書物は某が認め申したきうくわん鳥のことばといふ假名書きの本で、天下國家を治める心得を致したから、學校で講釋の間に諸人に讀んで聞かせてよからう」

主上たかどのよりありさせ給ひ、早速菅公を召して御相談ある。

「武藝もさる事ながら、高どのより望み見るに大きな點違ひだ。かの勇を好んで學を好まざれば其や亂なりといふ所だ。早早案じをつけてよからう」

「綸言の趣御尤に存じます。私も最初より學問と存じましたれど、師と致します儒者が船間故、着船を相待ちましたが、此節一人探し出しましたから早く申渡しませう。有合ひの儒者も多く御座りますが、朱子學は生きた天神の如く、徂徠派はけんはの火の見の如く、詩文章を事と致す者は下里はい人の似た山の如く、經濟の道を得ました者は御座りませぬ」

「けいざいとは何の事だ。夜食の菜の事か」

延喜帝は萬機の政を菅公に任せ給ひ、大國を治むるは小鮮を煮るが如く、大通の樂しみは金錢を抛つがよいと、常寧殿のたかどのにて飲みかけておはせし所、洛中何となく馬術稽古の間違にて騷がしかりければ、斯くなん詠じ給ひける。

「高き屋に上りて見れば騷ぎたつ民のきどりは間違ひにけり」

「さて〳〵是はけしからぬ有樣かな。遠くこれを望めば柳原廿四文の有樣にさも似たり」

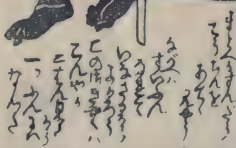
馬術稽古の者も、金のなる木は持つまいし、殘らず女郎屋の馬代につまりければ、今はせん方なく、所詮往來の男女をかまひなくつちまへて乘りなば、さぞ色色の口むきありて稽古にならんと、洛中洛外徘徊して、男女を見かけ次第傍若無人に押し倒して乘りければ、以ての外の騷動にて、喧嘩口論更にやむ時なかりけり。

「主人の奧方に不屆千萬、一寸ものがさぬぞ」

「何だ、不屆千萬だもすさまじい。こつちは御上の仰せ出されて、武藝の内でも戰場の懸引の第一たる馬術の稽古を勵むのだ。だまつてけつかれ」

「何でも二三百両にねごいの有る樣に乘りこまう」

「ねごいは新造の事さ」

「纏ひがすんだら提燈をあてゝ見やろ。ながえは隨分馴れて居なさるからよからう。此御客は今夜が二晩目だから一分にはなつた」

馬は生物にて百疋が百疋口むき同じからず。一疋よく乘れたりとて餘の馬のきつと乘れるに非ず。女郎もまた斯くの如く、一人が持てたとて又外のが持てるに非ず。ことにかげまも殘らず乘り盡しければ、嶋原丸山石垣繩手、數限りもなき女郎を乘りなば、色々の口むきありて馬術の稽古も上らんと、日夜に來り揚げ詰めにして稽古する。

若いものまとひをあてる。

ばら〳〵〳〵。

「主が下りなすつたら二の鞍をつぎやせう」

「春は南部屋の初見世に行つて、晝三の引付けを買ひませう」

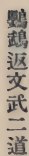
「チヤ〳〵もうそれでは二挺になりやす。直してやりやせう」
「しげ吉は南部出かの。どうぞ土佐といふ小さい所を呼んで貰はう」

馬を稽古する者は、小栗の判官鬼鹿毛の馬を乘りしを、かげ馬を乘りたると聞き違へ、其上弟子同士木馬になつては、日頃氣合を知つて居れば面白くなし、如何樣見ず知らずの者を乘つたらば、色々の口むきあるべしと、北野の天神の地內、或は芳町へ馬具を持ち行き、かげまを揚げて馬の稽古をする。

「こりや〳〵こいつはよつぽど左が強い。めつたに拳酒はされぬ」

「えらう鞍當りの強い御方じや」

「なんとどろだ。木刀三畧を許された義經の門人だぞ」

「たア引木刀なればこそ。これが眞劍なれば兩腕は切られたのだ。其氣取りで御むかひはきつと致さぬ。お心靜にお打ちなさい」

義經の弟子は元より、其外劍術を學ぶ者、觀音の額を見て、とかく劍術は先生牛若丸といひし時分、五條の橋にて千人切を致されし如く、大勢切られば上手にはなられぬ事とは思へども、人を切つては後難免れがたしと、毎晩五條の橋柳の馬場辻々小路々々へ出て、天氣のよいに高足駄をはき、日の丸の扇を持ち、木刀或はしなへにて往來の人を千人ぶちをぞしたりける。

「イヤぺんたらこ、これで九百九十九人目だ。もう一人で千人ぶちの御暇乞だ」

「とだらくや尻うつやみは三熊野のやつこのけつにひよくたきつ屁」

「賣物がくだけては、わたしはばんと致しませう。これ錦手をあはせて拜みますから、なんきん御免下さりませ」

上一人の思召によりて、弓馬劍術天下一統ことの外はやり、其上延喜帝の寒夜に八丈八反の御衣を脫ぎすて粗服になり給ひし由を聞き、我も〳〵と粗服になり、公卿殿上人鳶色木綿のぶつさき直衣、それより以下は鳶色のぶつさき羽織にて、各弓を持たせて徘徊し、町家の古道具屋にある兜の鉢、瀨戶物屋にある兜鉢、何でも鉢と名のつふた物かたい物でさへあれば、觀音の額の樣に射拔いて見んと、いきなりにこそ射くだきける。

「せと物見せんといふ儘に、ありや〳〵」

「何だやかましい事はない。なんのかのといふなら、亭主の頭を射拔いてやれ」

義經小栗の判官が門人是を聞き、きかンぬ氣になりて、義經の門人は五條の橋の千人切の額、小栗が門人は狩野古法眼に馬をかゝせて額を奉納しける。この三枚の内にて、馬の額は畫かきの手柄ばかり見えて、さりとは損な奉納なり。

「わりさき羽織がきついはやりだ。何でもきたのの若旦那が御出でなさつて何もかもあけたまりだ」

「向ふの長羽織を着た男は古風ななりだ」

鎭西八郎の門人ことの外大勢になり、中にも海野の太郎が一子小太郎生年七才にて南蠻鐵の兜を射抜きければ、餘り珍らしき事とて、右の弓矢兜を額にして淸水の観音へ奉納しける。

「八ッ七ッできつい弓勢だ。めづらしい。ゆんぜい八郎爲朝とは此事だ」

「みろく寸のかね四面のくち、上あく中から下やろなんど皆當流の大事で御座る」
「先生は大坪かの。あけつぼには懲りたもんだ」

小栗の判官兼氏は、鬼鹿毛といふ惡馬を乘りたる名人なれば、門人に敎ふるにも、木馬にては鞍味釣合知れかねるによつて、人を木馬にして乘れば互にその意味を呑込む事早しとて、先生門人互に木馬の代りになつて、乘つつ乘られつ　古をする。

「小栗殿はよく乘られるぞ。けんもん駕籠の乘り樣なら※が御指南致さう」

「八丈流なら此節は遠慮だ。しつそもう此頃はせいけん一統ぶつさき羽織の事だ」

理な事おしやる」
「腹がいたくば吉野へござれはどうだ〳〵」

鎭西八郎爲朝は、保元の夜軍に伊藤五郎同六郎兩人が胸板を射拔きたる強弓なれば、其致へ方格別なり。戰場にての弓は人を相手にするものなれば、じつとして居て射られる人は一人もなし、よつて大的雁的などもいくものでなしと、かの萬國の圖にある腹に穴のある人を呼び寄せ、具足を着せてつるし、はたらく處を具足の上から射拔かせる。

「てうどいつたが臍ではないかの」

「臍のいた矢に新見世が出來て、この暖簾にそれ矢とかいたは古いの」

「つるされてはたらく所はきつい南京あやつりだ。さんば〳〵〳〵」

「あたり引　楊弓ならきりといふ場だ。必ずふち矢は御免だ。はらわたがたまらぬ。はらわた樣は無

延喜帝寒夜に八丈八反の御衣を脱ぎすて粗服になり給ひしより、公卿殿上人其外庶人に至るまで、大通長羽織をさつぱりやめて鳶色木綿のぶつさき羽織を着しける。よつて末の世まで延喜勘畧の御代と聖代のためしに引くなり。

義經公宣旨を蒙り劍術指南あるに、其身は鞍馬の僧正が谷にて天狗より授かりし劍術なれば、さしづめ打太刀は天狗でなくては出來ず。さりながら急に天狗も呼ばれねば、打太刀の者に天狗の面をかぶせ、鳶凧の様にはねを付け、そばから大團扇にてあふぎ上げさせ、中を飛びながら打太刀をする。つかひ人は高足駄をはき、片手には日の丸の扇を持ちて片手にて切りあふ。

「ヤットウエイ」

「歯みがき反魂丹御用なら此間。ヤットウエイ」

「さよでござい」

「向ふに屏風が無いから風がきゝかねる。ソリヤ三介まつたり〳〵」

「飛び上つた身はきついもんだ。てんぐたまらぬたまらぬ」

いづれも時平清貫希世に内縁間柄のと當りさはり有りて用ひられず。其外にて御用に立つべき人を見出す迄は、よき人と言つては古人より外にはなし。尤も太平久しく打續けば、諸人文に流れて武に疎くなるものなれば、まづ最初に武を習はせて兵を強くせんと、兵法劍術にては源九郎義經、弓にては鎭西八郎爲朝、馬術にては小栗の判官兼氏を召出され、月卿雲客より地下に至る迄指南いたし取立つべき旨宣旨仰せわたさるる。

九郎義經鎭西八郎小栗の判官、召によつて參内する。

「身不肖の私共御擇みに預る條有難い仕合せに御座ります。併し私共はあなた方よりぐつと後の世の人で御座ります。古人とは御間違かと存じまする」

「時代違も知つて居るが、こゝがくさ草紙だからうつちやつて置きやれさ」

延喜の聖代とて太平打續きたるに任せ、上下萬民ことの外奢に長じ、美服を飾り無益の物入りある事を歎き思召し、召されたる所の八丈八反の龍紋の御衣、琥珀丹後の昆布の樣なる御指貫、柳茶緞子の石の帶迄、寒夜に脱ぎすて給ひ、疎相なる茶宇縞、京さんとめの御衣に召しかへ給ふ。女御更衣御召しかへを捧げ給ふ。

「重ねてから御下めしみつきに遊ばしませ。黑は御損で御座ります」

「成程朕もそう思ふ」

扨も菅丞相雷となりて時平のおとゞ清貫希世を蹴殺して後は、朝廷さつぱり御役人少なにつき、菅丞相の一子菅秀才を召出され、政道輔佐の臣となされ、萬機の政をあづけ給ふ。

菅公萬機の政を取行ひ給ふに、これ迄勤め給ふ公卿は

叙

曲禮に曰く鸚鵡よく言ども飛鳥をはなれず傾城よく言ども詐言をはなれず予諭ス案はほるといくどをよそに人真似をなすと鸚鵡の似たる桑吉了の類なりと爾云

壽亭主人　春町

鸚鵡返文武二道　上
通油町
つたや

賴朝公ぬらくらの大小名を召して仰せけるは、「先に重忠にはからせ文武の性をふるひわけ、ぬらくらの面々は七湯にて晒し大磯にて身上をふるはせ、文武二道に導かしむ。自今以後それ〴〵に文武の道を學ぶべし、必ずしもぬらくらの心を持つべからず。今にも軍があるならばところで軍がなるものか。文とも武とも言つて見ろ」いづれも「有難う存じ奉ります」

喜三二戯作
哥麿門人
行麿畫

「今日はしたゝか油を取られると見える」
「何ときめられても一言もない」

「此衣類脇差ぁ覺えがござろう。以來柔弱の心を改め武をはげみ給へ」

重忠の嫡子六郎重保、

「地獄かと御目違ひの女は茶さ」

「以來はきつと改めますでござりませう」

「蘆の湯にての振舞、主命なれば御免下されませ」

「其節の追剝は我々兩人でござります」

「面目次第も ござりませぬ」

「三つかさねて三五十五だ」

大名のつく無間の事なれば、各揃ひのゆかたにて大磯の揚屋の池を手水鉢となぞらへ、百人にておつ取りまきしは、繼子立に異ならず、三萬兩の金がほしいなあといふ聲、百千の雷の如く、振りあげたるひしやくは水車の化物かと怪しまる。大磯中の藝者めりやすの爲に總仕舞にして同音に謠はせしは、花々しき貧乏也。

路銀にはどうした穴のあく事と、身にぞ知らるゝ湯場つらや。下略めりやすも事終り、一イ二ッ三イッの掛聲にて既にろたんと振り上る。不思議や池の内よりも、あらはれいでの山吹色、三十箱にて三萬兩、ざぶり〳〵と持出づる。これも重忠の計りごとなるべし。「黒ん坊なら枝珊瑚樹といふ場だ」

りそうなものだ」
「あわ太夫を呼びにやれ」
「生爪に火をとぼす人もあるに、あげづめに日をくらすとは有りがてえ」
「是からけはひ坂へ押して行かうか」
「それがよからう。少将でも買ひませう」
「大きにおせわ」

大礒の艶

さてあまたの大小名湯場を立ち大礒へ泊りし折柄、重忠の計らひにて馬入の川上川下に堤をつかせ、川上の水を切て落しければ、酒匂満水となり渡る事叶はず、皆々大礒に十四五日逗留して現をぬかして樂しむ。大礒にてはこゝこそ金の儲け所と思ひ、傾城は晝夜三分を一時三分と直をあげ、藝者はめりやす一つに迎ひが三つ程かゝり、平澤が蕎麥は安い所が千疋、もなかの月八片を以て小判一兩にかへ、甘露梅一つが一匁づつ、山屋豆腐は一丁で南一などと滅相界な事ども也。

斯くて大礒の大奢りに、百人の脊中にて三萬兩のさがりが出來、川があいても立たれぬ仕儀になり、せん方つきて百人言ひ合せ無間の鐘をつく事になる。

「何ぞ氣の變つた遊びがあ

流石大名の事なればかさかきは一人もなく　蘆の湯へは誰も來ずと雖も、箱根に地獄ありと聞きて、中洲の氣取にて蘆の湯のあたりを尋ねあるき、大きにへこむ。

「女と侮つて無禮のはたらき、御仁體にも似合ひませぬ。お相手になりませうか」

「今の樣に言つたのははんの座興といふものさ。いやならいやですんだ事だ。氣の短けえ」

「地獄と見たがこつちのあやまりさ」

蘆の湯の體

榛澤六郎、本田の二郎、古代の定九郎たおかといふ身にて三人をためす。

「金があらばこゝへ出せ」

「悪くじたばたすると芋ざしだぞ」

「褌ばかりは御免下さりませ」

「命と下帯は御助けだんのうそでこいだんのう」

重忠のまはりもの 石臼藝助、ぬらくら次第一々帳面に書きとめ來る。

「茶香生花鞠俳諧は文道へ引込まれる。碁將棊亂舞釣網は無理に武へこぢ付けるがよい。同じ淨瑠璃でも義太夫は武の方へ引込み、豐後と河東は文へ入れずばなるまい。楊弓小鳥めくりの三つは、何と方をつけたものだ」

「楊弓は弓の字故さしづめ武にしるし、小鳥は無風流ながら文に致しませう。めくりは行司の貰ひか」

「底倉遊びの方々は身振聲色相撲拳皆武邊の內へ記しませう」

「同じ拳でも本拳は文の場がござります。唐拳は武の事さ」

底倉の體

土屋三郎
「さんきやうが身振はどうだ」
「まづ紋所がきつい。身はむちやじやわいの」
「そちが若衆ならおれは小山だ」
「りうさい」
「それ勝つたぞ」
「口をしい。滅相に負けるの」
「とつととな」
「こんな色子もねえもんだ」

木賀の體

小四郎義時、

「しやんと小褄を」

「もつと皆まで書くに及ばず。受取りかぶとだ」

「犬坊さんならわんと小褄はどうだ」

梶原三郎、

「箱根はこまのよい所だから買つて行きだ」

「わたくしは鶸がほしい」

宮の下の體

「しんがいのわちはせ郎はどうだ」

「是はあやまる〳〵」

「的はすつきり音が無い。太鼓ばかりなりかげ様」

「豊後の次郎で義太夫も氣まぐれだ」

彈きながら肖をふるや五郎。

「苗字が三浦だから猟は得手ものだ」

「おれが名のきつころ龜は御免だ」

いづの次郎、

「今日はすつきり出ずの次郎だ」

堂ヶ嶋の體

安西の彌七郎太皷の役。

「小皷の時はまんざいの彌七郎さ」

「おれが掛聲は紋所の矢ア羽アだ」

土肥の千次郎喜多流を舞ふ。

「先祖みくりやの三郎より傳はりしめくりさ」

「おらが先祖はよみの宿禰」

土肥の彌太郎やたらに句を吐く。

お馬屋のとく齋。

「とく場なら致しませう」

「植物が近いであやまる」

「人倫よし懲よし平山のうま所だ」

塔の澤の體

「影法師で見ては皆黒彌吾だ」

「かなや金五郎のふろ屋の段を御語り」

「黒彌吾さんだから御所望申しやす」

「おれが語ると風呂屋の段では無い黒彌吾だんだ」

いばら左衛門、

「手見禁々々々」

たいらくの平馬の丞、

「將棊をさす時はけいまの丞さ」

ろすぎの八郎寒そうな身で居る。

「いばらく待ち給へ・飛車手王手をかけられて竹の下のまごつき左衛門だ」

石臼屋の藝助とて、何もかも少しづつ噛み分けた男あり、諸大名の御意に入り、此度湯場へ御供にて來る。

皆きゝをせうといふ原小二郎。

香をきく事は餘程うぬの小太郎。

佐原の十郎、茶の湯は飯より好きにて、朝からちやばちの十郎。

湯元の體

數多の大小名七湯に分れ、三廻りの間すきな事をして樂む。

重忠の計らひにて、鎌倉の女藝者を七湯へまくばり置き、飽きの來ぬ樣にしかける。

「宇佐美の三郎、垣の内に居る處はうさぎの三郎じやアねえか」

「伊藤九郎祐清、蝋の思ひも天にのぼるとは、鞠の事じやアねえか」

「ありく」

「あいかうの三郎、筆をしては勝負のつかぬ男さ」

ぬらくらの大小名を見分け、文武兩道の中に勸め込むべき由仰せを受け、箱根の七湯へ御暇賜はる條、所司の別當工藤左衞門へ申し渡す。

「長生不老の拔穴より出たる面々ばかり申し渡すでござらう」

「小名へは私より申し渡しませう」

「文人より武勇の人が餘計でござります。併しぬらくらの方がしたゝかにござります。さて斯くの如く仕分けましたは、米つきの千石通しからの存じ付きでござります」

「文より武の勝つたるは珍重珍重。長く世の靜かな程自然と文は勝つものだ。おれが世話をやくはそこの事だ」

「妖怪がおらが手合を恐れたかして一疋も出なんだ」

「れつから張合が無かつたの」

「是がほんの穴へはまつたといふのだ。あな憎やあな憎や」

文武二道の外にえりのけられし糠武士の分は、恥をかくとも知らず、重忠がはかりごとにて百人いかさまにかゝる東海の天なるべし。文道に心ある人皆この穴へ出る。

抜穴の口へとろゝ汁をこぼし置きける故、皆々すべり落ちる。これぬらくらふくべのあたりなり。

「このねばるのが不老不死の薬かの。さてけしからぬ潤ひだ。長命の場だらう」

「からだが大ぬら〳〵だ。どうも足が踏みとめられぬ。ア、どうも〳〵」

「何だかおつな所だの」

「きついこたアねえ。はいれはいれ」

富士の山穴の内の體
「俗物の行かれぬ處だ」

「人穴三文々々々々」
さき知らぬ穴は　富士の根いつとてか
こぬかもどきに　武士の降るらん

斯くて重忠計りごとにて、富士山の中に不老不死の薬あり、鎌倉の大小名人穴より入り此薬を求むべしと仰せ渡されければ、不老不死の薬と聞き、皆々富士の人穴にぞ入りにける。

重忠神楽堂の彌宜の身振にて下知する。

「見合つて〳〵。是で大概一番の桝は仕舞うた」

頼朝公御前の人を退けて仰せけるは、

「如何に重忠、我四海を治めしより日本の大名小名安堵の思ひをなすと雖も、武備に怠る心生ずべし。治世と雖も文ばかりにては治め難し、今鎌倉の大小名文に傾く者何程、武にはやる者何程といふ事を、汝が智恵を以て計るべし」

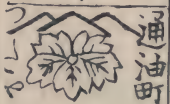
「所詮文武兼備したる武士はなければ、どちらへか片より申すべし。又文でもなく武でもなきぬらくら武士多かるべし。三つに分けてお目にかけませう」

「御人拂ひの御用は何であらう。何か文福茶釜で劍菱を飲むといふ樣な聲が聞えた」

「秩父殿は四相を悟るといふが、お寺から使の來る事をさとるのかね」

「さればもし双六の賽の目の事か」

ニコアー質勝文野暮也。文勝質高慢也。文質元結人品にして月額青き君子國五穀のおり挽めきのおそばきらびの意思が智恵の斗桝に謀きし大小名の不知の山三國一斗一生の恥を晒し七温泉の垢をけて流して三嶋にのめ大磯乃化粧あつきとげす魯し文武二道萬石通を名付けしを〔山形〕の旅聟れ〔紋〕十ヶ齋小通して〔印〕作ス

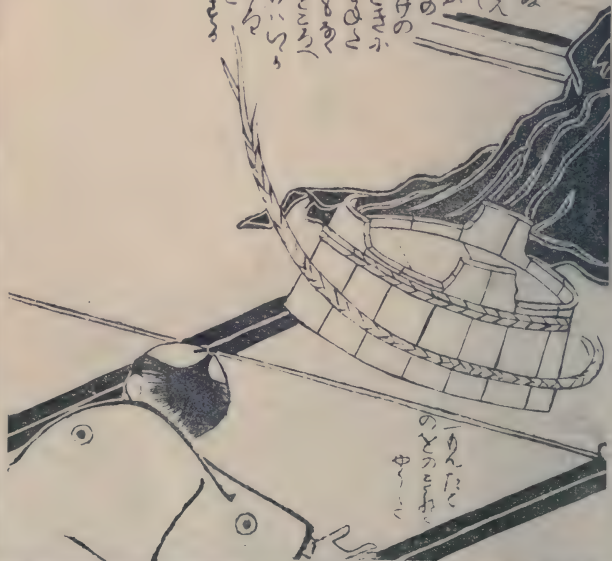
文武二道万石通
中
通油町
つたや

此ところは皆様御推量でも知れた千秋萬歳、かくはきつい無駄。

奈蒔野馬乎人
忍岡歌麿

「犬の糞や馬の糞のねえ處へ落ちればいゝが、天道人殺さずだ、あんまり行き過ぎて海へでものめり込み、靑海苔にでもなつて年玉になるもいゝ處だアちう」

其間に金十は先主より呼び戻され、元の如く番頭株となられ、歌菊が年があいたら女房にならう程に、廓へ一寸となりとも御出は御無用、御身の爲あしゝといふもある圖な奴と、目出度を祝しけれ。

金十郎ははねられたる勢にいづくとも無く飛びあるき、浅草藏前通りへ飛んで來て、やう／＼己れが內の前の手桶の積みあげたる上に落ちかゝりし故、家內の手間取ども何事やらんと見てあれば、旦那殿なり。これはこれは丁度よい時お歸り明日は淺草の市なれば、留守に拵へためし手桶を殘らず賣り出さんと言はれて、金十郎も件の樣子を話し大笑ひをして、夜もあければ手桶をはこび出し、奥山せましと積みならべしに、吉原より來りしとて、只一口に十二萬三千四百五十六の手桶を買ひあげしは、膽の潰れし事なれども、金十は金儲けした跡でよく聞けば、歌菊が喜八と言ひ合せ、主に金も送られまいしと、やつてのけたる立引き狂言。

とふてしなたつからぬ
鬼なぬけの又ちさん〳〵さへ
みだるゝたのしきいをして
ゆるもれのさのうなまよ
たりうろくしほせいでその
もゐろかといたよやゝまなけの
ちくあり〳〵ふそのもゐろさきさふ
今すふいぬやるせてそのもゐさ
たかのいきゆのふいろくともすく
もゐをいされますとんおところへ
とひ八丈一まへてもゆけいいつ
とむぞといくおかうてんとくる
ちふいふちうてちるくめへを
もる

どうしても中たがかゝらぬ故、名主殿へ持参して、旦那寺を頼み詫言して居る時、不思議なる哉胴たががみり〳〵といふが最期、そのはねたる音は玉屋が仕掛の如くなりしが、そのはねるさきに金十郎は居合せて、其はねたがの勢にいづくとも無くはね飛ばされ、又どんな處へとび八丈島へでも行けばいゝがと無駄を言ひながら、天道樣次第におつこちる工面をする。

「とんだ事とは大方こんな事だアらう」

「あれ〳〵ふんどしのさがりが見えます。どこもかも恰好より大きそうだ」

「一文だこの緒の切れた樣だ」

着かぶりといふ身だ」
「チンチツンテンテット
ン」
「アレが麗子とやらがした身振かの。蝿が燈心をつかふ様だ」

手盥のたがをかけて見る所に、江戸の井戸がはより十層倍大きし。よつて色々にして櫻の木につるしあげ、段々とたがをかけしが、緣のくみたが一つに色々と工夫すれどもかゝらず。其上酒けまはつて來る、そろそろと泣き出す故、大人どもはどつと笑ふ。其時金十そばにありける大人の上着をしばし假に着て、旣に拍子をはじめける。

道成寺

雁に恨みは數々御座る。初手に雁を取る時は、諸行むしやうにつゞかむなり。後にはねをのす時は、世上めつたに飛びあるき、天上のゑは腹も寂滅爲樂となり、大人國へどつたり落ちるぞはかなける。

「何の事はねえ、俄の獅子を舞ふ樣だ」――――

「三つ蒲團の上に五つの夜

「あいこぼれますではね
え、つぶれます〳〵」
「花さんが書いた浮む瀬の
盃が隨分大きいが、これ
から見ては小原でもね
え」
「何だ、よりも〳〵せんし
はこふしに御すゝませな
されさみしく夜をあかし
う。いやな奴だがいゝ
手だ。歌菊といふはどん
な女だか見たいものだ」
「さアおれにも見せたがい
い。てめえばかり見ずと
もちつと見せこよみ」
「おれが處の手盥もちと小
さいから大きくして貰は
う。さしわたし八尺位あ
ればいゝ」

それより大人ども皆々寄合ひ、汝は何人なりといふ故、我は大日本江戸の生れなるが、雁國へ來りし譯、並に懷より歌菊が文など出して見せければ、其方が商賣は何なりと問ひし時、私はたがやなりと挨拶する。そんなら手盥のたがをかけてくれろと賴む故、まづ飯の種にありつき、珍らしき人なりとて、大盃に酒を振舞ふ。金十は右の盃を兩手取り、からだ中の力を出してやうやう持上げ、半盞飲みしが、其酒凡三升ばかり、肴は何か知らねどもはさんでさしたるを、兩手にて俵を持つ樣に肩へ上げて腰をのし、横の方からちぢつとづつ食ひける。時に大人どもは歌菊が文を見れば、細かな上に小さくして見えず。よつて蟲眼鏡に入れて之を讀む。

「しつかりと持て〳〵」

大人國の名主殿の引窓から茶釜の上藥鑵の蓋の上に落ちしを、娘や母親寄り合ひ弄びにする。

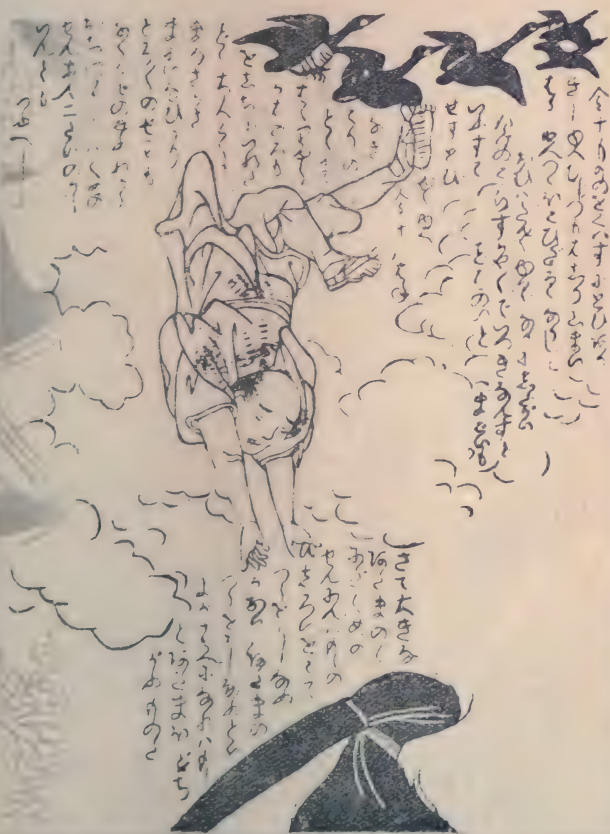
「よくごらうじまし、豆人形とは大方此事で御座りやせう。あんまりいぢり廻して潰さねえ樣にしやれ」

とねぶにしたるほうづきの如く取扱ひけり。

「さても大きな女だ。仁王の嫁御だらう。但しは奈良の大佛の娘か、釋迦ケ嶽がおいらんといふ樣な事か」

「あれ何かいひやすよ」

金十物を食はずに飛びあるきし故、むしづも走りしまひ腹が脊へつく程ひだるくなりし故、帶は段々ゆるくなるに隨ひ、雁は殘らずがやがやて、いつ來なんすといふ捨言葉の暇乞もせず飛び行く故、金十は羽なき鳥の如くにて、伯良が羽衣を質に入れた如く、大人國へ眞逆樣に、稻光りどろどろの世話もなく、雲の破れから落ちかゝりしは、久米の仙人二代の後胤ともいふべし。

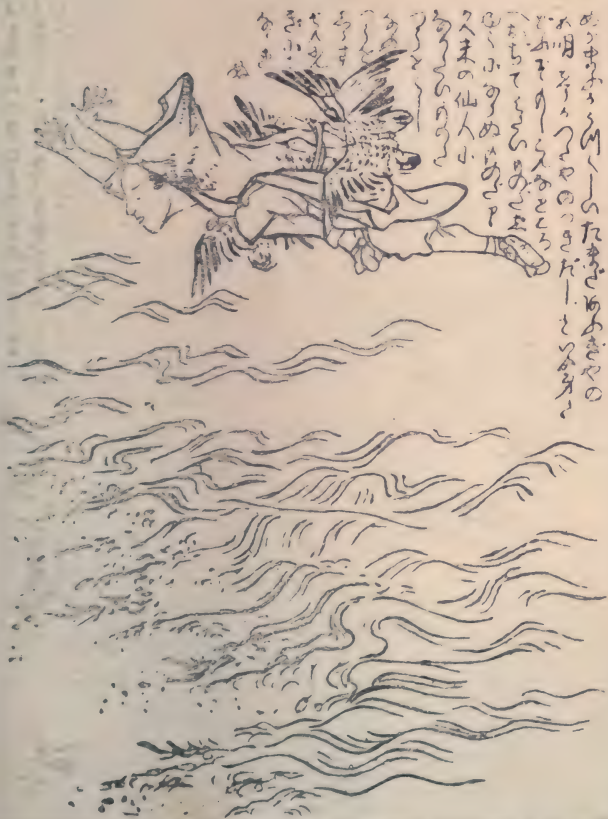
「さて大きな頭の國だ。久米の仙人はもゝの白いを見て通を失ふが、おれは頭の通を失ふとは、世が末になればもゝと頭程違ふものだ」

ぬものだ。アヽ久米の仙人になりたいものだ。通を失ふ通を知らず。仙人氣にもなられぬ」

「あれ見なんし雁と一緒に道中をしいす。人間の樣だね。あれが比翼の鳥とやらでありいせう。どうか助兵衛そうに見えいすよ」

「お崎どん見さつせえ。アレが久米の平内とやらいふ仙人かの」

「お前飛だ事をおつせえす。そりやア久米の天人さ」

見おろせば意氣ちよん國の有様は、內に錢少く、きやんこくかんは其昔、こりやまたといふうんつくが、とはうもないを植ゑしとかや。大通國には大様に、錢金萬とまき散らし、似た山のうぬ櫻、文の使は來たりぶらまの山、女護の島には男なく、むかふ島の如くなる舟着きよろしき所にて、舟から客のあがる時、棧橋へ迎ひに出るが茶屋の役、中居といふとも中に居ず、太鼓といふとも音もなし、金次第にて罰利生ある國々を雁と一緒に飛び行き、とまりも知らぬ雲の上、雲をつかむといふ事も、かゝる事をや言ふなるべし。

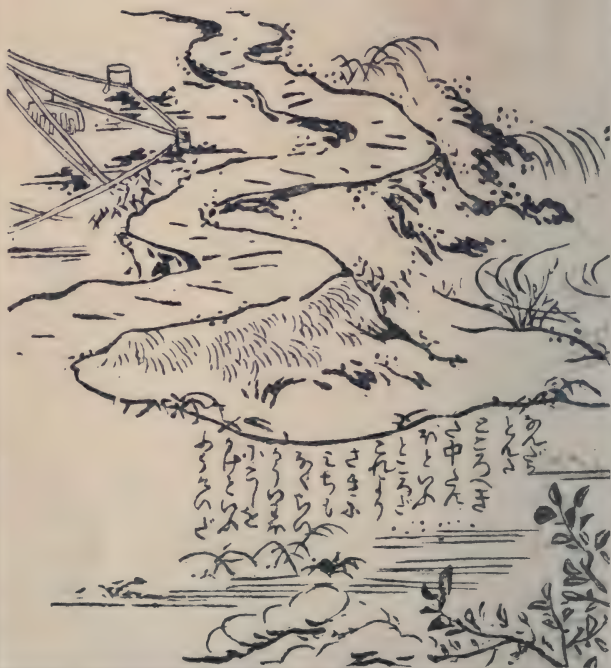
「目がまふが美しい玉だ。扇屋の五明亭か蔦屋の突出しといふ身だ。どうぞもしこんな處へ落ちて見たいものだ、自由になら

思入れ雁を腰につけて、しよつて立たんとする時、東方しのゝめの景色あかく、朝日たち昇りしかば、腰にはさみし雁の氷次第々々に解けて、うそ八百羽程のがはねばたきをする音は、鐵砲玉に帆をかけたるが如し。金十郎も一時に雁と一緒に飛び行く有樣は、其昔松若は天狗にさらはれ、金十は雁にさらはれ、見ぬ國國を見おろしあるくこそおかしけれ。

「鶴に乘つた仙人は見たが雁に乘つたは是がはじめて。さぞ内ではかけおちでもしたと思うであらう。ほんの雁が飛べばしつぽんのじだんだ」

ぐんてへめつひてきさ
ところがちびさんが
たおしかたつかへたごえんハ
えんがそれうついている
中へ面きの中をおつけく
くひをねぢつきたちへむさめが
そのおもきたるハひきうすを
うへつけさやうのぐんとのハ人を
えもよふるもかすえがぐんと
いふめふたのハこのくふようぞ
ちぢまりける

雁國へ行きついて見た所が、左次兵衛が咄に違はず、雁はみんな氷りついて居る故、雪の中を押分け押分け、頸をねぢつては腰へはさめば、其重たき事は挽臼を腰へつけた樣なり。雁どもは人を見ても飛ぶ事もならず、みんながんといふ目にあひしは、此國よりぞはじまりける。

「コレハ〳〵すさまじい雁だ。みんなじつとして居るが、どうやらきつ先生のばかすといふ仕打では無いか。あひるなれば來い〳〵豆食はせうとも言はうが、雁來い〳〵小豆を食はせう」

「何だか飛だ所へきた中田圃といふ所だ。これより先に路もなく、賴光巖に腰をかけといふ風景だ」

金十雁國の道行

がんとうつ、かねに恨は多けれど、かりがねといふ名に惚れて、啖をつくしの雪國へ、雁取帳をとりに行く、心の中の慾心の、利口に口はしやべれども、一體がんがまやなれば、本讀む事もなら晒し、きびらは高く思へども、諸方のかり金がんぎやすりとせつかれて、どうぞ今度は雁をいくらもとらまへて、らく雁をせん志、内へは手間を入れ仕事、あてども無しに旅へ出るとは大だらひ、人の手桶をかりたがに、つるべた錢を儲けため、世間の奴をさかぼうと、ながめて見んと思ひつゝ、旅の衣裳をみがきたが、笠傾けて出でて行く、慾の程こそうたてけれ。

毎日たがや殿は昔の奢りに引きかへて、がたりびしりして憂きを送りしが、いつぞや雁の氷り付いて居る咄を聞き、内へは市に賣出す手桶を萬と拵へんと手間取を多く入れて、其身は雁の國へと赴きしは話の種とぞなりけるは、どうやら萬八のおつかぶせらしい仕打を一はたぬけて參ります。

「此たがかけて仕舞つたら柳行李を買つて來て、雁をしよしめに行きませう。若し取れぬ時はがんといふ咄だ」

それより喜八が店請になり、竹町邊に店借して桶屋をはじめしが、今日は長屋振舞をはじめしが、一つ長屋の左次兵衛が咄に、おらは嘘を筑紫の果で御座るが、とはうもない寒い國で、雁や鴨が大きな池に氷り付いて居るのを頭をねぢつては取り〳〵、腰へ付けて出ます、之を通ひで取りに行く故に雁取帳といふを拵へ、函谷關で其帳面を改めます。金十之を聞いて肝をつぶし、何とそれは取つて來て安針町へ賣つてやるといふ所はどうだあらう。そりやアいゝ點さ。どうぞ路銀を拵へて金儲けに行きたいものだ。

「今時の傾城に誠なしとは嘘さ。誠も少しは有馬山、又喜八が諸事世話をしてくれの鐘としやれるも根つからさえやせん」

「モウお一つお過し〳〵」

これからはお冷飯の段、あんまり金きんが過ぎたから、あの通り大通のしまひはどんつうには劣つたものだ」
「あの人もどうやらおちが仲間になりそうな人だ」
「久しいものだが頼風といふ身だね。御座一つでひてうの別れ、おのれを責むるおのが家、出でてゆくこそ悲しけれ」

金十は居續けなどが度重なり、親方の大のまうせんとなり、親方のやぢを甚だ腹をたち、古わんぼうに寢御座一枚にてお拂箱の身となりしが、いつぞや喜八が、まさかの時はどうともと言ひし言葉に任せ、料理番でもして見る氣になりしが、世にありし時質に取りしたがやさんといふ三味線は高い物なる由、これからたがやをはじめけるが、初手の内は釣瓶の底のぬけたのや四斗樽を切りて水桶にする位の事をして裏店住居して居るうち、揚屋町の喜八たのしき奴にて、淺草竹町に表店を借りて手桶を夥しく仕込みける。

「おのれ不屆な奴、君傾城に心を奪はれ、憎い奴じや出て行け」

「ア、氣の毒な事だ、今迄二の膳を食つた代りに、

ずい歸りだぜえ。今夜は大方菊園か菊の井といふ名代らしい晩だ」

「悪推ばかりおつせんす。行燈に無駄がき、もう歸るも古い奴ね」

「もう歌の介様はとんだお志のよい立引きも御座ります。手はよし、歌はなさる、ほんに六藝とやらやつかいとやらが揃ひやした」

「またはあそこの格子先、面白そうに話しゝて、居さしやんしたと聞く時は、しみ〴〵腹もたつた山」

金十は旦那の金で奢りちらし、中の町は人目多しと揚屋町でしやれしが、歌菊にのぼり詰め鷄を無性に憎がり鐘つき坊主を親の敵の樣に言ひしが、朝の歸りのずい歸りには大門で必ずえの一聲が耳に殘り、圍ひしてある非戸のきはの路の惡い處へ來た時分、もしえ何ぞ忘れやアなんせんかと言はれかぶりを振るも人目を恥ぢれども、心の中では内の工面を十面つくつて案じ、十一面觀音へ願も掛けられず、七面だうなりとなげやり三寶になりけるも、皆女郎買の御冷飯なり。

「むかふに人〳〵。早く來さつせえよ」

「こゝの内にも赤いべゝがいけえ事ある。もうぼんかねだぜえ、今夜はなぜか引けが見えねえの」

「あすの朝は茶漬を食ひの

心許無うありいす留め申さうと言ひなんすが、そうしてもよからうかね。金様えゝ加減に騒ぎなんし」

「二階の客人は引け時分に歸し申せばいゝ。袖の梅でも買つて來てあげたがいゝ。金さんの道中はおそろが池の大蛇、一瓢や麥汁が昔を思ひ出します」

「チヤ〳〵馬鹿らしいよ。道中の眞似かへ。富士太郎が跡先になりいしたよ」

「二階に外の客人もありいす。ちつと靜にしなんし」

「歌野や又眠るじやアねえか」

「喜八さんよしなんし。重たくつてなりいせんよ」

「だまつて居ろ、おしつけおもたせのものをはちの上へのせにやアならねえ」

「おいらんも歌の介さんとこゝへ度々落ちるゝなんすから松葉屋言葉がうつりなんしたよ。そうてめへ（一字缺）なんしたといふもいゝてんだの」

金十郎は、ちよびと蒟蒻のつまみ食ひ又は山谷くらの遊びの面白みより、土橋中町は錢だけ美しく二軒茶屋は何もかもせんに打ち、銀杏屋升屋は江戸前の根元と覺えてより、ちと北の遊びへさそはれ、揚屋町の伊勢屋といふ茶屋にて樂しみ、竹屋の歌菊といへる突出しに馴染み、初會裏のお定まりより、いつ來なんすが數重なり、互に末の事迄咄しあひしが、此伊勢屋の喜八といふ者も氣もしき奴にて、

「たとへ主がかぶりなすつたら、其時は糸屋の娘ではねえが、店請は私で御新造樣は歌樣さ」

「これ〳〵喜印、此褌をかろ取つて、外八文字のくりし出し歩み、初會の客にしこなしは、ぶろかが先へぽこたぼん、すいど甘いの實くらべ、起請せい紙を背中にかき、どうだい鑵市もはだしでにげまきの助六、あんけら門平はどうだらう」

「もし旦那へ、二階で歌の介さんの言ひなんすには、いつそむら樣は醉ひ潰れて寢て居なんすから、こよひけえし申して

で一分持つて行きな。二日ばかりに二十兩遣ひはたして一分殘るといふ文句さ。先度の袷羽織もけえしなせへ、但しつけかへかの」

「これはわたしが所がらで藝者の三味線でござりやす。どうぞ二十兩かしてくんなせえ。とはうもねえ、二十兩の質を一分とはあんまりつれない番頭さん、丈は古いから才三さんとでも云つたら二十兩貸さろか」

と上げたりおろしたりして口說く。

「どうやらかみ駒のあたりに瑕がある樣だ。堅い糸卷だぞ。チチンツヽチトおいあゝ面白の春景色。口でいふには手が廻らず、そして魚と水とも久しいもんだ」

「小僧はさみ將棋もえゝ加減に仕舞うてお茶を持つて來い」

こゝに所はお箪笥町引出し横丁にきくがまやといへる質屋あり。旦那殿はかたじけないに一割の利息をかけてあたじけないを植込み、意氣みをならせずしわみを重とし、手ばなを開かせて暮しける故、番頭手代多く遣ひ、何不足なく暮しける。取分け旦那殿は、とんちきの癖に目利味噌にて道具質を取る故、正宗利久の茶杓の古近江の三味線など色々な物を持つて來りしが、元來こゝのうちは旦那が留守といへば番頭の金十郎は目利といふ事はながしめより外に知つた點の無き故、折角持つて來りし質物を持ち歸す事數ふるに暇なし。今日はたがやさんの三味線を持つて來り二十兩かして下されと口說く。

「なんぼたがやさんだと言ひなすつても、旦那殿は留守なり、わたしはちつとばかり米櫃をかじる位はずりやすが道具の方はお先眞暗、旦那の歸るま

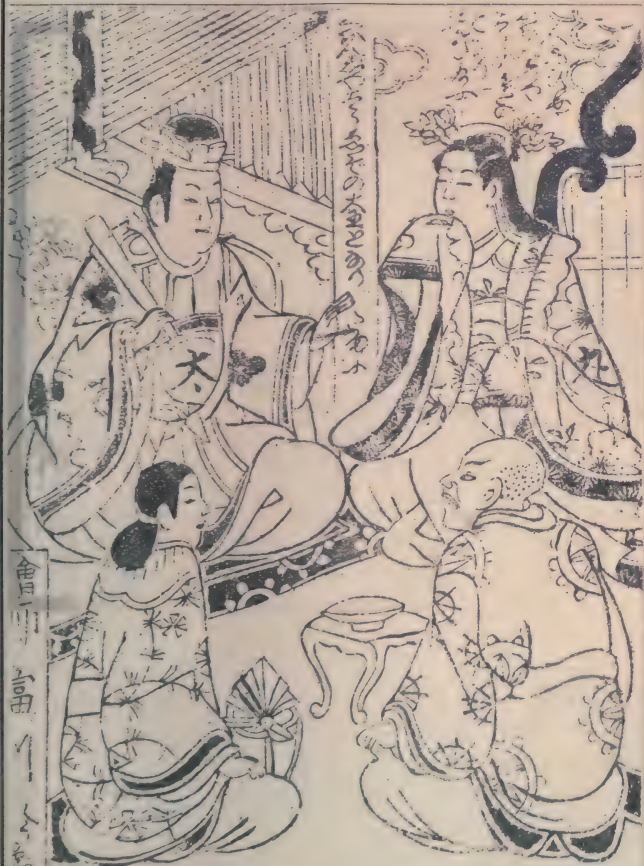
叙

此草紙乃太意ハ一雁が飛べバ石亀の地だんだと云
ことくつゐに作者の紙をなめて筆をつゞく千字の句吃
に倣せ一寫をんおみなさ内田てとなりし八畫作
ともしに勤筆麁の紀御伴判に[illegible]の悪巻の一色へ
付バ鴛笑ひのたねとなるへくのさものと
なしつ一[illegible]を御覧下さるべくしと申すと

太山蔭馬鹿人

右通 うそ
糙而 まこと
啌多雁取帳 中
大門口

雁中

人丸姫、冠者太郎の御臺となり悦び給ふ。
冠者太郎蝦夷の大王となり給ふ。

武藏坊辨慶、蝦夷が島より人丸姫のむかひに來り、梶原平次をいけどり、蝦夷へ連れかへる。

「武藏坊、姫君むかひに參りました」

かぢはら平次。

いばの十藏、人丸姫を景清がかくれがへ伴ひ來る。

惡七兵衛景清は、兩眼ひらき、娘の孝行をかんしんする。

人丸姫、親子の名のりして悦ぶ。

ばんばの忠太、景清をうたんとして踏み殺さる。

景清は一心に清水の観世音を祈りしが、たちまち両眼ひらき悦ぶ。
「腕まはせ」
「おのれ目があいたな」

梶原、ばんばの忠太が注進にて、まことの景清をうち取らんと、大勢にて取り巻く。
「景清くわんねんしろ」
「こりやたまらぬ」
「なむさんしまつた」

悪七兵衛景清が弟いばの十藏、先年景清と名のり、鎌倉殿の御前にて兩眼をくりぬき、日向勾當と名のり、諸人に心をゆるさせる。

いばの十藏は、思ひがけなく人丸姫尋ね來りし故、ふびんに思ひ、一大事なれども景清がかくれがを敎ゆる。

いばの十藏、日向勾當となりゐる。

人丸局、父景清にめぐりあひ、守り本尊を證據に親子の名のりをねがふ。
「さてはまことのとゝ様は外に御座りますか」
ばんばの忠太。

梶原が忍びのさぶらひ、此髑を見て、注進せんとかけいだし、朝比奈に殺さるゝ。朝比奈梶原が家來を踏みころす。

「朝比奈様、おさらば〳〵。いかい御世話になりました」

朝比奈の三郎、人丸姫を景清にめあはせんと、日向の國へおくり、たしかなる船頭を頼む。

「委細かしこまりました」

さても平家のさぶらひ惡七兵衞景淸は、平家の仇をむくはんと鎌倉殿をねらひ、見あらはされ、日向の國の奥山に身をかくし、時節を待ちしが、つひに兩眼泣きつぶし、里の子どもめくら仙人と申しけり。

「時節とて口惜しやなア」

武藏坊、若君を船にのせ蝦夷へわたる。
冠者太郎名殘ををしみ給ふ。
「やがて迎ひの船をよこさう」
朝比奈見送る。
人丸姫わかれを惜み泣きしづむ。

冠者太郎つねひさ「さては聞及びし辨慶とは汝よな。我を迎へに來りしとは太儀々々。父義經公つつがなく渡らせ給ふとな」

人丸姫。

武藏坊辨慶、朝比奈と力くらべせしが、勝負つかざれば、かづらを脫ぎ姓名をあかし、太郎殿に對面する。「御父義經公、高館落城の砌より、ひそかに蝦夷へ渡りたまひ、今にては蝦夷のあるじきぐるみ大王と申し奉る。若君冠者太郎樣、蝦夷へ御供申すべし」

朝比奈辨慶が樣子を聞き安堵する。

武藏坊辨慶、義經公の仰を受け、蝦夷が島より冠者太郎の迎に來り、人目をはゞかり朝比奈に身をやつし、梶原が家來を追ひちらし、まことの朝比奈に出合ひ、力だめしをする。

「受取つた」

冠者太郎「こちらの朝比奈怪我せまいぞ」

人丸姫「あぶない。こつちへよりなさい」

小林の朝比奈、わが姿をにせし曲者せんぎしてばけを顯はさんと、上より大石をなげ付くる。
「こりやにせ朝比奈、此石を受けて見よ」

かゝる所へ、朝比奈かけ來り、二人をたすけ、大勢の追手を散々おつちらす。

「おへない強い野郎だ」

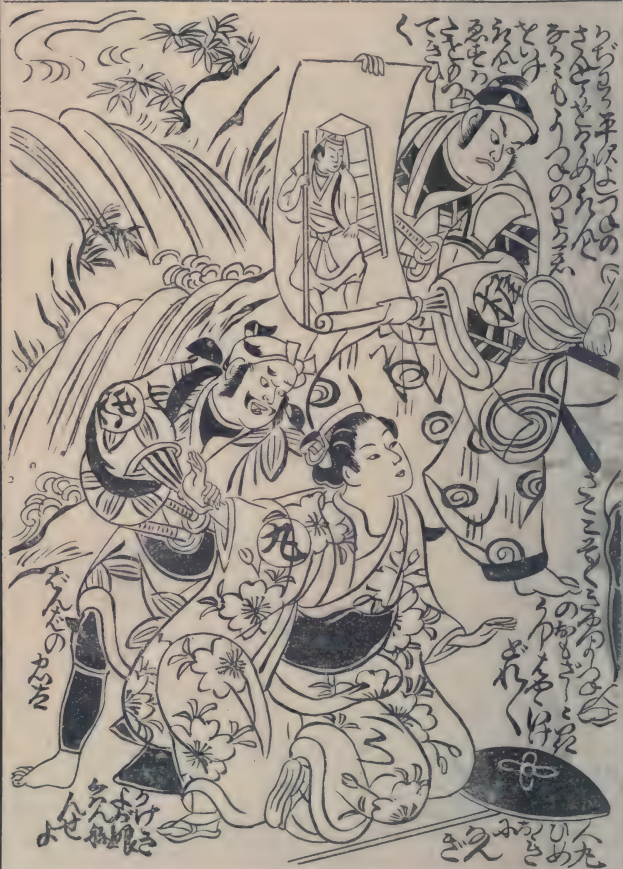
此ていを見て不思議に思ふ。

「ハテ合點のゆかぬ。我によく似た」

冠者太郎人丸姫、稲村のかげに忍び樣子をうかゞふ。

梶原平次、朝比奈のはたらきを見て大きにおそれ、はふはふ逃げて行く。

ばんばの忠太恐るゝ。

「者どもめつたにそばへ寄るまい。くびを拔かれては、よい女を見る事も物いふ事もならぬぞ」

冠者太郎、思ひよらず人丸姫にくどかれ、何かとひまどる内、梶原が家來に取りまかれ、大きに難儀し給ふ。梶原平次、義經の殘黨をからめ取らんと、中にも義經の若君を生捕らんと、繪姿をもつてきびしく。

「さてこそ〳〵。きやつ義經のおもざしに生寫し、早く生捕れ〳〵」

「わつぱめ、義經の小せがれに相違はない。のがれぬ所だぞ」

「やれ聊爾し給ふな。拙者は熊野へまゐる山伏だぞ」

人丸姫大きに難儀。

ばんばの忠太「景清が娘觀念せよ」

景清がむすめ人丸姫、父に幼少にてわかれ、あけくれ戀しく思ひ、父のあり所を尋ぬる。

かめわり山にて誕生ありし義經公の若君、片山里にておひ立ち、冠者太郎と名のり、父義經公の御行衛をたづねんと、武者修行に出で給ふ。

然るに父義經、奥州にてほろび給ふとも、又蝦夷が島へわたり給ふとも、噂まちまちなれば、武者修行にたち出で、事の實否をたゞし、蝦夷にましまさば蝦夷へ渡らんと心ざし、立出で給ふ。

上

かゝるめでたき折柄なればとて、ときの鳥は角前髪のかづらを着て、五郎時致と名のる。
小林のあんかうこれに控へたりと、草摺引のたて入大當り大當り。いづれも樣へまづ今日はこれ迄と、太鼓をこそはうち出したり。

鶴は千年のよはひを授け、龜は萬年の壽命をことぶく。

御祝言御見舞、嶋臺のかはりはすぐに鶴と龜とが勤められまする。何とよう致した仕組で御座りませうがや。

これから魚鳥たち、面々思付きのたち藝所望々々。

鶯姫は、はじめ鳩七と少しもつれしが、海老ぢいのきびしさに、てうつぽうとて飛び去りぬ。此度かも八の取持にてえびのよめとなり。きす之丞と夫婦になる。

「見さしやる通り、かしらがちときやしや過ぎたが、毒を持たぬ我らでござる」

里付きには山から女よしなにあやなす。

「お聟様はほんに梅幸にそのまゝ。梅は鶯のやどり木じや」

床盃の取持には、鰻かば介ぬらくらとして出づる。

入道の扱にて、雨親方とも中直りと聞えければ、惣鳥のかしら孔雀、こうの鳥、魚の方には人魚、海老の隠居、此上諸事ともに鹽梅よきやうにと、和睦のふるまひ致しける。

此時人魚、鷺のむすめ鶯を申受け、海老のせがれきす之丞とめあはせしぞめでたしめでたし。

こうのもろ右衛門。

くじやく。

海老の隠居、ひげをのばし、腰をかゞめて喜ぶ。

人魚なかうど。

あこう取持つ。

「私は何もかも殿にまかせ置きまする」

かも「御肴しましよ。魚と鳥とは獻立に離れぬしうち、此上ながら御ひいき頼み上げまする」

はも六「いやはや、どなたも品のよいお付合なれば、料理のあんばいも、上々吉印でござります」

「成程々々、重ねて和睦の見参までは、しやち殿、鷲殿、又逢ふまではさらばじや」
これより二番目々々々。

既に魚鳥、或ははがひをもがれ、ひれを拔かれ、戰ひければ、兩方の小鳥小ざかな、ざこもとゝまじりにまかり出でて挑みあふ。

小鳥ども、山々里々くさむらより集る。

「がん／＼三くちあはせ一口に食ふぞ」

當るを幸とつて食ふ。

海川の魚あつまる。

既にかうよと見えし時、鳥の方には鷲の太郞藏、魚の方にはしやちほこのつよ熊、手詰の勝負になりにけるを、菩提所の住僧たこの入道あつかひて、魚鳥中よくをさまりけり。

「先々此度の出入り、拙僧がもらひ受けました。御兩所の勢、大谷廣中村介ときて居ますじや」

鷲の太郞「然らば入道の扱にまかせ、此場は引きませう」

しやちほこ「如何にも如何にも、互に引くで御座らう」

とんび、くらげを捕へて筋骨を引きぬく。

「こいつは龍宮の門番だげな。すた／＼坊主が編笠かぶつた樣な見ともない。筋骨ぬいてくわんぜよりに致さう」

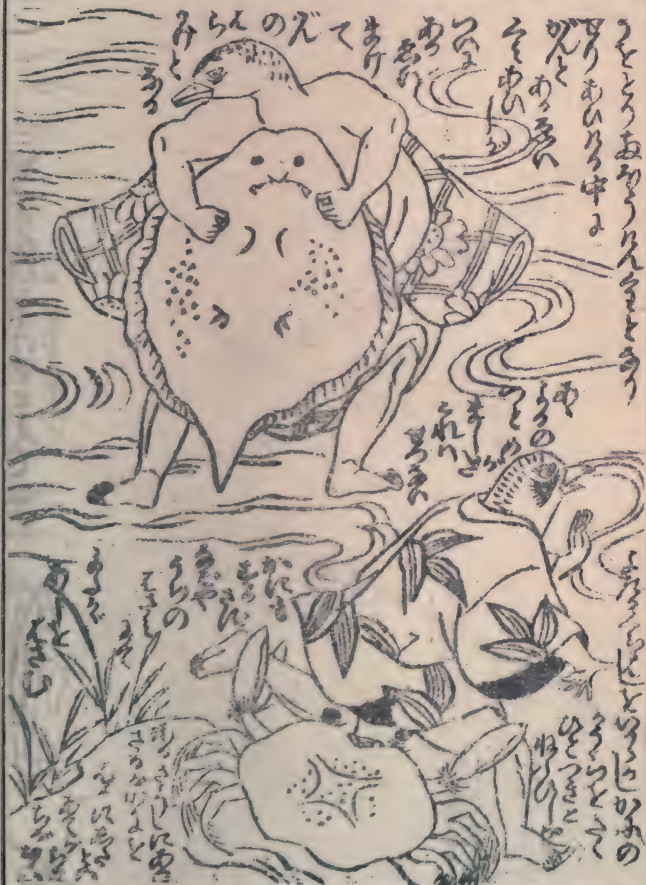
へらさぎ笠にておさへらる。

「われはよく日暮にさわぐ鳥じや。へらをつかつて逃げて見ろ」

「なんとおこぜが手並はすさまじからうがや」

魚鳥兩方喧嘩となり、せりあひける中に、雁とあかえひ組合ひしが、遂にあかえひ負けて雁の腹掛となる。夜鷹くちばしを怒らかし、蟹の甲らを只一突とねらひしが、蟹もすかさず、名古屋うちのはさみにて、夜鷹が足をはさむ。

「赤ざうしにある、猿が蟹を馬鹿にしたとは當がちと違はう」

「あゝ夜のつとめがましだ。これはせつない」

鳥の方には、みゝづく鳥難儀に逢ふと聞き、親分のくまたか、魚の親方鯨と出入りする。

くまたか擬勢。

「鯨とはわれか。はて色の黒い男の。ぶち殺してひれを鏡立にするぞ」

鯨くまたかと立引き。

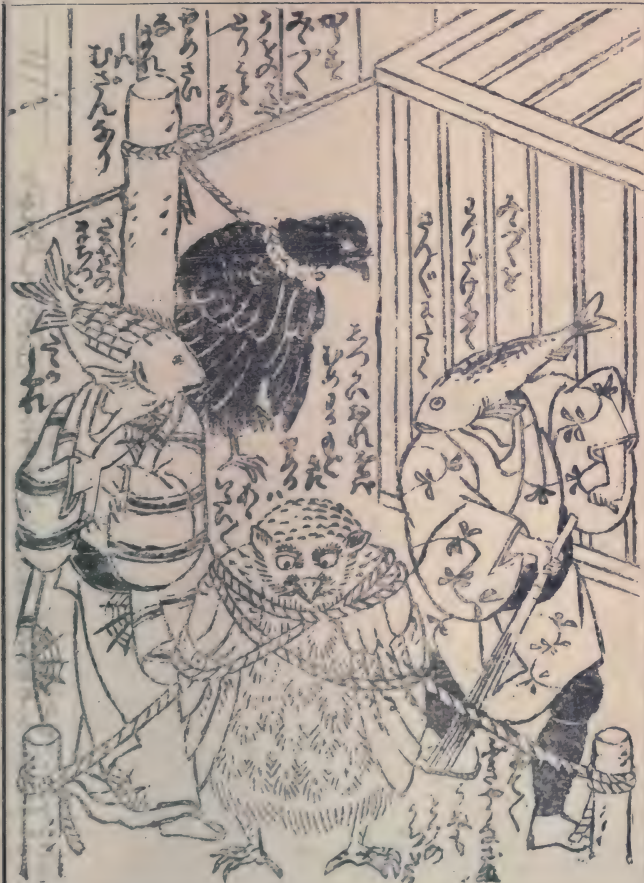
「おゝそれもよかろ。慾のくまたかとはそちじやな。はねをもいではばうきにするぞ」

もず踏みのめさるゝ。

「鏡立のあまりは我ら耳かき」

とびうを。

鳥みゝづくは、魚の方へとりことなり、責めさいなまれしは無殘なり。
みゝづくをわり竹にて散々にたゝく。
「しつかいおれをば梅若もどきにせめるわ、あゝ痛い痛い」
「さて／＼無器用なざま。うぬも鳥のうちだか」
「鯖どの、まちつとたゝかしやれ」

かつをさめは、やきめしのはかりごとを以て鳥をわなにかける。

鳥いぢのいやしき鳥なれば、やきめしを見て腰をぬかし、わなにかゝる。

かつを「われが屋根のうへで猫を見て尻をつゝくとはあてが違はう」

「まんまと鳥は我等ぶつちめました。よい見世物とはこれさ〳〵」

魚の方にはふぐ鯰はふ〳〵の體にて歸りける故、いよいよ腹立ち、ある夜ひらめかながしら、竿にもちをぬり、鷺の門前にきたる。こゝにみゝづくは、さしたるわざなき鳥にて、ぶしやう者なれば、門番つとめしが、ひらめかながしらにさされける。

かながしらい介。

そのほとりに、念佛組のほとゝぎす、ほぞんかけたは君ならではと、雨の降る夜も風の夜も通ひ〳〵て、曉かけてくどく。

ほとゝぎす「戀なればこそ此樣に雨の夜もかよへ。まことに寶井其角が發句に、ほとゝぎすあかつきかさを買はせけりとはこれじやな」

又魚の方より、ふなのはや介此處へ忍びきたり、樣子を見る。

ふなのはや介「うまいなうまいな。にごりじや」

鷺のむすめ鷺は、二八の秋もなかばにて、思ひをかけぬは無かりけり。うちの子飼の鳩七と忍び〲にさへづりて、ほうほけきやうの中となり、てゝつぽうなる戀路なり。

鷺ひめ「なんと鳩七、わしはかはいゝかや」

はと七「お前のことは、てんと豆をひろはぬ法もあれ、おいとしう御座ります」

きじのけん六「やいふぐめ、うぬが名は世間でいやがる。煮賣屋でそばえたとは違はう。えらをひつぱなされるな」

斯くてふぐ鯰、ゆひ入をしたゝめ、鷺の方へまゐり、鶯事よめに申受けんと述ぶる。

鳥の方大きに腹だち、使者に來りし二疋のさかなさんざん打擲し、掏肴くゝりつけてぞ追出しける。

家老鸚鵡吉兵衛、ふぐ鯰推して推參せし事いきどほる。

料理方みさご、さん〴〵家老どもに叱らるゝ。

はくてうしろ八「ふとどるしの鯰め、瓢簞のにぎりこぶしを見知らせう」

此事、上ざかなたいじんの耳に入り、げにもとや思ひけん、如何にもして鳥どもに無理言ひか(缺)鼻あかせんととりどり評議をなす。はるかの末座より、ふぐのよ(缺)なまづぬら(缺)まかり出で申しけ(缺)鷺兵衛の鷺姫とて、うつくしき娘あり、これを貰ひ給ひ、若旦那きす之丞様の御かもじになされよ、と申せば、皆々尤とこれにきはめける。

ふぐのよことび助「内々でふたりして相談いたしました」

よど小市「これはよう御座りましよ。鷺のうつくしさ、それはそれは佐野川せいふと來て居ります」

おさけ「あいさ、いや早どうもどうも」

西の宮たいしん「然らばそちたち結納を持參して、その姫をもらひ受けよ」

すゞきの前。

なよしぼら右衛門。

なまづぬら介。

昔より、うまい物とさへいへば、鯛ひらめとほめられしに、雁鴨といふあぶらこい物におされて、さかなの威勢もとろへけり。あるが中にも、冬のまぐろとて、燒物に肩をいからかしたる所に、それさへ雞の煮賣にへされ、無念たぐひなかりけり。

にはとり煮賣屋「みづからあんばい致さう」

けふの(以下缺)

きじのけん六「やいふぐめ、うぬが名は世間でいやがる。煮賣屋でそばえたとは違はう。えらをひつぱなされるな」

斯くてふぐ鯰、ゆひ入をしたゝめ、鷺の方へまゐり、鶯事よめに申受けんと述ぶる。

鳥の方大きに腹だち、使者に來りし二疋のさかなさんざん打擲し、樽肴くゝりつけてぞ追出しける。

家老鸚鵡吉兵衞、ふぐ鯰推して推參せし事いきどほる。

料理方みさご、さんざん家老どもに叱らるゝ。

はくてうしろ八「ふととゞるしの鯰め、瓢簞のにぎりこぶしを見知らせう」

此事、上ざかなたいじんの耳に入り、げにもとや思ひけん、如何にもして鳥どもに無理言ひか(缺)鼻あかせんととり〳〵評議をなす。はるかの末座より、ふぐのよ(缺)なまづぬら(缺)まかり出で申しけ(缺)鷺兵衛の鷺姫とて、うつくしき娘あり、これを貰ひ給ひ、若旦那きす之丞様の御かもじになされよ、と申せば、皆々尤とこれにきはめける。

ふぐのよことび助「内々でふたりして相談いたしました」

よど小市「これはよう御座りましよ。鷺のうつくしさ、それは〳〵佐野川せいふと來て居ります」

おさけ「あいさ、いや早どうも〳〵」

西の宮たいしん「然らばそちたち結納を持參して、その姫をもらひ受けよ」

すゞきの前。

なよしぼら右衛門。

なまづぬら介。

昔より、うまい物とさへいへば、鯛ひらめとはめられしに、雁鴨といふあぶらこい物におされて、さかなの威勢おとろへけり。あるが中にも、冬のまぐろとて、燒物に肩をいからかしたる所に、それさへ雛の煮賣にへされ、無念たぐひなかりけり。

にはとり煮賣屋「みづからあんばい致さう」

けふの(以下缺)

魚鳥
あん
ばいよし

目録

本書の如きは蓋し上乘のものなるべし。

又焼直鉢冠姫稗史億說年代記　三册　式亭三馬畫作

享和二年西宮與八板。年代記に擬して稗史の變遷を略叙し、作者畫家の名字を集め、當り作の一覽を示し、各派の畫風の相違より出板元の住所目印までも漏さず、而も終始一種の興味を以て之を行る。間〻誤謬あるを免れずといへども、亦黃表紙界の珍として、趣味を江戸時代の輕文學に有する者を朶頤せしむるに足るべし。蓋し本書并に「小野簒譃字畫」の如きは、式亭(文政五歿、四十八)の擅場なるべし。

以上の十書、何れも原本をその儘寫眞版に附し、上欄に本文と同一の文言を掲げたり。各書の扉亦原本二卷又は三卷中の一をそのまゝ撮りたるものにて、その上中下等の文字は本文に關係なし。

大正三年十一月　校訂者　武笠三

も、亦作家として相當の價値を認められしは、其作の年々續出せるにても知らるべし。
本書の趣向は、彼の卷首の「魚鳥あんばいよし」の流亞にして、「世帶平記」と全く同じ趣向なり。但その何れが兄何れが弟たるかは、未だ考證を經ず。

曲亭一風京傳張　三册　曲亭馬琴作　畫者未詳

享和元年蔦屋重三郎板。文名一代を壓したりし曲亭（嘉永元歿、八十二）も、享和頃には未だ平凡なる黃表紙作者たりし也。寬政三年「京傳門人大榮山人」と名のりて其の處女作を出せし以來、折々作は出せども、餘り歡迎はせられざりしと見ゆ。此書は寬政八年に、京傳の「心學早染草」に擬せる「四遍摺心學草紙」と同じく、聲名當時の文壇に喧しき京傳をかつぎて、其の行はれん事を僥倖せし作なるべし。その所謂「京傳張」は、京傳の店にて賣る煙管を材料に用ひたるを示すと共に、暗に作風の京傳に髣髴たるもののあるを思はしめん積なるべけれど、因緣咄のしつこさは京傳の洒落なる作風に似るべくもあらず。曲亭は到底黃表紙の作者にあらざる也。而も曲亭の黃表紙としては、

寛政四年鶴屋喜右衛門板。これも例の「二十三部」の中也。當時の子供の口ずさびに唱ふる詞を取り集めて趣向を立てたる所、一寸目新しくて、落を取りしものと見ゆ。青本年表に、「文軒翁云、芝全交が長物語大に名あり。此前に杜芳作に同じ趣あり、外題年號を逸す。追考して記すべし。全交作は是に擬して出藍なり。此後築地善好が小田原相談、續物と曰ふべし」

全交(寛政五歿)は通稱山本藤十郎、江戸の能狂言師にして滑稽の才あり。筆を黄表紙に執りて、所謂當り作多く、名聲京傳と相如きたりといふ。「大悲の千六本」「十四傾城腹の中」「大ちがひ寶船」等は其の作の主なるものなり。

竈將軍勘略之卷　三册　時太郎可候畫作

寛政十二年蔦屋重三郎板。時太郎可候は、浮世畫の泰斗として名聲今や世界に轟ける葛飾北齋が、筆を戲作に執りし時の戲名にして、「勘略之卷」は實に其の黄表紙に於ける處女作也。北齋是より屢、黄表紙の作あり、其の名聲は籍甚といふ程にはあらざりし

の名人」とす。「蕙齋略畫式」等、多く彩色摺の畫手本を出して畫名世に高かりし人。

世上洒落見繪圖　三册　山東京傳畫作

寛政三年蔦屋板。山東京傳が洒落本作者の巨擘たると共に黄表紙に於ても亦一代の鬼才たることは、特に絮説することを要せず。然るに其の作動もすれば、風紀上之を探るに憚るべきもの多く、爲に其の代表作と稱せらるゝものを掲ぐることを得ざるは、校訂者の遺憾とする所なり。而も本書の着眼亦頗る奇拔にして、世の所謂通なるものの行き方を寫して其の行き過ぎを嘲る所、春町の「楠むだいき」と同巧異曲にして、作者の才氣を窺ふに餘りあり。這の奇才子の面目を傳ふるに於て、蓋し亦足らざるを憂ひざるべし。京傳亦浮世畫を北尾重政に學びて、畫名を政演と號し、屢〻人の爲に黄表紙に畫き、又自作のものにも畫けり。而して京傳が黄表紙に畫筆を執る事は、本書の出でたる寛政三年を以て終とし、本書は實に其の最後の自畫作なり。

形容化景𦜝動鼻下長物語　三册　芝全交作　北尾政美畫

に至りしといふ。文化十年、七十九歳にして歿す。

鸚鵡返文武二道　三册　戀川春町作　北尾政美畫

これも「二十三部」の中にて天明九年蔦屋の板也。喜三二の「萬石通」の後篇とも見るべきものにて、其の行はれし事「萬石通」に劣らざりし事は、「作者部類」に、「就中萬石通の後篇鸚鵡返し文武の二道彌益行はれて、こも亦大半紙摺りの袋入にして二三月頃まで市中を賣り歩きたり(流行此前後二篇に勝るものなし)」と記せるを以て知るべし。

戀川春町は安永四年「金々先生榮華夢」を著はして、はじめて赤本を大人の讀物にしたる黄表紙作者中の先輩にして、鳥山石燕に學びて畫をもよくせしかば、其の黄表紙には自畫作なるもの多し。上にいへる「榮華夢」及「高慢齋行脚日記」など皆自畫作なり。「鸚鵡返」の流行餘りに甚しかりしかば、樂翁侯より呼出されしが、病の爲に參らず、やがて寛政元年卒去せりといふ、年四十六、身分は駿州小島侯の藩士なり。

北尾政美は、鍬形蕙齋が北尾重政の門人たりし時の名也。「浮世畫類考」稱して「近世

人の穴探しもし盡して、珍奇なる題目の無きに苦しみたりし黄表紙の作者、忽ち起つて此の好題目を捉へ、一代の賢宰相が苦心慘憺の經綸を茶化すに一流の諧謔を以てし、以て世俗の新政に對する一種の反抗心に投ぜり。而して其の筆頭を、黄表紙界の老手喜三二の手に成れる此書なりとす。されば此書の一たび出づるや、「古今未曾有の大流行にて……赤本の作ありてより以來、かばかり行はれしものは前代未聞の事なりといふ」(物之本江戶作者部類)此書の評判餘りに喧しかりしかば、戀川春町は翌天明九年「鸚鵡返文武二道」を出し、京傳も亦「孔子縞于時藍染」の作あり。いづれも同じ穴をねらひしものにして、而もいづれも時代に歡迎せられたりといふ。

作者明誠堂喜三二は、羽州秋田侯の家臣にして、當時戀川春町と雁行して洒落本黄表紙作者中の大立物たり。加之、狂歌をつくりては手柄岡持の名一時に高く、狂詩には韓長齡として夙に世に知らる。實に當年の一奇才たりしが、「萬石通」の餘りに世にもてはやされしが爲に、當局の忌諱に觸れ、爲に是より筆を戲作に絕つの已むを得ざる

とあるを以ても、其の喜三二に非ずして、燕十なる事は明かなり。志水燕十の傳詳ならず。「作者部類」に、「燕十も才子にて洒落本の作幾種かあり云々。三和(唐來三和)と親友にて、合作の小本も出でたり云々。此燕十は他事によりて罪を蒙りて終る處を知らず」と記せり。「雁取帳」以前に燕十屢燕十の名を以て筆を黄表紙に執れり。然るに此書に變名を用ひたるは、或は「作者部類」に記せる犯罪と相關聯せる事情あるには非ざるか。或は「奈蒔野馬平人」を以て、本書の畫手「忍岡歌麿」卽ち浮世畫の名手喜多川歌麿の變名となす說あり。未だ十分なる考據を經ず。

文武二道萬石通　　三册　喜三二作　行麿畫

天明八年刊行の大當り作、これも「名作二十三部」の中にして、蔦屋重三郎の板也。昨年松平樂翁侯老中となりて時弊の匡救に鋭意し、只管文武二道の奬勵につとむ。蓋し柔弱風をなしたる當時の武家に取りては、眞に晴天の霹靂たりしなるべく、延いて起れる當時の上下一般の一大恐慌は、之を想像するに難からず。是に於て、安永以來通

作者にして畫者をかねたる富川吟雪は、浮世畫類考に據れば、通稱を山本九左衞門、諱を房信といひ、江戸大傳馬町二丁目にしにせたる繪雙紙問屋の主人なりしが、家衰へて累代の家業をやめ、遂に畫師になりし人なりといふ。年代は詳ならざれども、作物の今に殘れるものより推せば、寶曆より明和安永頃までの人と見えたり。

景淸盲目となりて日向に謫居せるを、人丸姫といふ娘の遙々尋ね行くは、謠曲「景淸」の趣なり。之に義經の子冠者太郎をからませたるは、蓋し歌舞妓狂言の趣向にして、本篇は之を襲踏せるものなるべし。

右通 䗁而 唫多雁取帳　三冊　奈蒔野馬乎人作　忍岡歌麿畫

三馬の億說年代記擧げたる所謂「名作二十三部」の中にして、天明三年江戸通油町の地本問屋蔦屋重三郎の刊行せる所也。作者奈蒔野馬乎人は、當時の洒落本作者志水燕十の變名なり。然るに「億說年代記」は、此書を以て喜三二の作とす。但しその誤なることは靑本年表に文軒翁既に之を辨ぜり。本書の卷尾、作者の名の下なる印章に「燕十」

物たるに至れり。之を第三期とす。而して滑稽洒落を生命としたりし黄表紙の時代もこゝに終りを告げ、これより濃艶なる合巻物出でて、其の後を承くることとなれり。

魚鳥あんばいよし　二册

作者詳ならず、時代も亦詳ならざれども、本文中よど小市の詞に鶯の美しさを形容して、「それは〱佐野川せいふと來り居ります」とあるによりて、畧これを推定すべし。佐野川盛府は、かの石疊模樣に今も市松染の名を殘せる名優佐野川市松にして、寶暦十二年四十一歳を以て歿せり。

魚鳥の爭は「魚鳥平家」「精進魚類物語」等德川期以前既に幾らも粉本あり。中にも一條兼良禪閤の作と謂はるゝ「鴉鷺合戰物語」の、鴉方と鷺方との確執の原因を戀の遺恨にしたる趣向は、直接にこの書の粉本たるに似たり。

めくら仙人目明仙人　二册　富川吟雪畫作

尙その內容につきて略說すれば、寶曆より安永の初までは、前に引ける「作者部類」にも記せる如く極めて幼稚なるものにして、到底兒童の弄び物に過ぎざりき。これ黃表紙の第一期にして、此時代の作者には觀水堂丈阿、富川吟雪、近藤淸春等あり。第二期は、安永四年戀川春町が盧生邯鄲の夢の故事を飜案して「金々先生榮華夢」を著して、當世粹子の穴を穿ち、滑稽を主とせしより、俄然として黃表紙は大人の玩びものとなり、春町及び明誠堂喜三二、山東京傳、芝全交以下相踵いで起り、爭つて諷刺滑稽の作を出して、一時の盛を極む。これを黃表紙の全盛時代とす。本書收むる所三馬の僞說年代記の末尾に記せる所謂「當り作二十三部」、大半は此時代に出でたるもの也。然るに寬政の初に至りて、當時の黃表紙作者中の大立物たりし山東京傳、その洒落本の作によりて幕府の忌諱に觸れしより、影響は黃表紙にも及び、其の作る所勸善懲惡の臭味を帶ぶる事となり、之と同時に南仙笑楚滿人の「敵討義女英」出でて一時の喝采を博せしより、心學物と敵討物との流行を誘ひ、就中敵討物の流行次第に激甚にして、文化三年に至りては、新板黃表紙の全部を擧げて敵討

り。價も黄標紙新板一巻八文(二冊物十六文、三冊物廿四文)、古板は七文(二冊物十四文、三冊物廿一文)なりき。(中畧)

かくて明和の季より草ざうしの作滑稽を旨とせしかば、大人君子も是をもてあそぶあるにより、いよ〳〵世に行はれて、畫外題を四遍の色摺にしたり。そが中に殊に當り作の新板は、大半紙を二つ切に摺りて薄柹色の一重表紙をかけ、色摺の袋入にして、三冊を一冊に合巻にして、價或は五十文六十四文にも賣りけり。(こは天明中の事なり)

かくて寛政の初より、草ざうしの價又登りて、黄表紙は一巻十文(二冊物二十文、三冊物卅文)、黒表紙は一巻(二冊物十六文、三冊物廿四文)になりぬ。

かくて文化の年より、これらのよろしきものを半紙に摺り、無地の厚表紙をかけて袋入りにしたるを上紙摺りと唱へて、京攝の書賈へ遣して彼所の貸本屋へ賣らせ、こゝにても二三百部は春毎に賣りたれども、價の貴ければにや、草ざうしの一部數千賣れたるには似ざりき。(上紙摺りは三冊を合本二冊三冊にして、壹匁より或は壹匁五分の物あり)(下畧)

右にて其の形式の大概は之を知る事を得べし。

緒言

黃表紙は、安永天明より文化文政の頃にわたりて、盛に江戶に行はれたる所謂輕文學の一種にして、黃表紙の名は表紙に黃色の紙を用ひたるよりの稱なり。今左に曲亭馬琴の「近世物之本江戶作者部類」の文を借りて、其の起源沿革の大概を叙すべし。

江戶の名物赤本と云へる小刻の繪草子は、享保以來しいだしたり。貞享元祿の間享保までは、さろ草子ありと雖も、紗綾形或は毘沙門龜甲形なる行成標紙を以てして、酒顚童子物語、朝顏物語などの繪卷物を小刻にしたり。或は界町なる操り芝居、和泉太夫が金平淨瑠璃の正本を板せしのみなりき。かくて享保よりして後は、丹標紙をかけたるもの年々出でしかば、世俗これを赤本と喚做したり。かくて寬延寶曆より漸々に册の價貴くなりしかば、代ろに黃表紙を以てして、一卷を紙五張と定め、全二卷を十二文に鬻ぎ、三册物を十八文に鬻ぎたり。そが中に古板の册子には黑標紙を以てして、一卷の價五文づつ也。世にこれを臭草紙といふ。(中畧)この頃より畫の外題にして、赤き分高半紙を裁ちて墨摺一遍なりき。その作新しきを旨とし、舌切雀、猿蟹合戰などの童話を初として、或は太平記の抄錄、說經本の抄錄など春每に種々出でた

黄表紙十種

全